皇の、御稜威は四方に輝きて、清國遂に和議を乞ひ、臺灣島を獻上し、合戰爰に治まれる、君が御代こそ目出たけれ。臺灣島の土賊共、龍車に向ふ蟷螂の、斧を振ふと聞えしかば、征討の師をぞ遣はさる。近衞兵の精鋭を、率ゐて御渡海めされしは、陸軍の中將大勳位、北白川の宮とて、金枝玉葉の御身なり、三貂角の御上陸、幕營ありし其跡に、木を削りてぞ記るさるゝ、炎熱燒くが如き日に三貂大嶺の險阻をば、馬にも召さず越え給ひ、大雨しきりに降る時も、濡れにぞ濡れて進まるゝ、士卒も之れに感激し、病兵さへも立上り、命を惜まず進軍す、諸所の砦に籠りたる、賊兵等の打出す彈丸は、雨か霰か白雪の、降り注ぐが如くにて、砲烟暗く天を覆ひ、百雷等しく落つるに似たり、宮は矢石を冒しつゝ、突喊せよと下知あれば、川村少將兒島大佐を始とし、勇み立ちたる近衞兵、我先きに奮進し、敵の本營に突て入る、賊兵之れに氣を呑まれ、右往左往に逃げ散りて、降參する者數知れず、大砲小銃の戰利品、山をも築かんばかりにて、凱歌どつと揚げゝれば、宮は此の時悠々と、基隆城に入らせ給ふ。斯くて六月十日には、臺北城を陷としいれ、七月に新竹城を占領し、明る八月には彰化臺灣の兩府を定め、十月の始つ方、臺南さして進まるゝ。天暑くして瘴癘多く、地嶮しくして糧道絶え、千辛萬苦の其の中を、宮は士卒と食を分ち、

晝は汗馬に鞭をあて、夜は荒野に露營して、戎衣の袖に月宿し、只國の爲め君のため、平定の策を廻らし給ふ。

嗚呼御痛しや悲しやな、竹の園生の御身にて、餘りに艱苦を積ませられ、遂に御病に罹ら せ給ふ。日々に重らせ給ふにぞ、御供の人々打驚き、都に歸らせ給ふ樣、切に御諫め申せども、宮はいつかな聞し召さず、我れ官軍の將として、賊徒平定見ぬ中は、例へ臺灣の土となればとて、我のみ士卒を打ち捨てゝ、如何でか都へ歸らんと、駕籠に召されて進ませらる。御臨終の其の際に、賊徒平定と聞召し、宮は莞爾と打笑み給ひ、萬歳とたゞ一聲、叫び給ひしばかりにて、敢なく天に登らせ給ふ。傳へ聞く日本武の古事を、今目の前に見參らせて、國中の民も士も、慟哭せぬはなかりけり。

去りながら昨日今日とは思はねど、老少不定に貴賤なし、唯人は名こそ惜しけれ、皆人は、名を千載に殘せかし。

臺北融々仁政成　皇軍到所涌三歡聲一
旭光將被臺南地　殲二彼渠魁一安二萬世一

と宮の吟じ給ひし如く、盛功偉烈後の世に、輝きわたるぞ有難き、北白川の水は近きて歸

らねど、月影永く澄み渡り、光は世々に流るらん、光は代々に流るらむ。

十五、凱旋

臺灣戡定の任務全く終了したるを以て、聯隊は十一月十日臺南を發し、十七日彦山丸にて打狗港を出帆し、同月二十七日東京に凱旋した。

此の役、吾聯隊の戰死者は中尉中村多摩男・少尉大村武・准士官櫻井茂夫以下下士卒九十二名、今九段靖國神社に合祀せられて居る。

第七章　日露戰役と吾が聯隊

一、日露戰爭の原因及發端

遼東半島は、日清戰爭の結果、一度我が領有に歸したるも、露・佛・獨三國の慫慂に基いて清國に還附した。然るに三十年の秋、清國山東省に於て暴民獨逸人二名を殺害したれば、獨逸は清廷を責め、直ちに軍艦三隻を膠州灣に進めて此所を占領した。所が元來膠州灣は露國が已に冬期の軍艦碇繫場として居つた所で、其れを獨逸に占領された爲め、露國は軍艦を旅順口に進めて之れを占領したのである。

旅順口は何人も知る如く渤海の關門であつて、天嶮稀に見る軍事上重要の地である。曾て我同胞幾千人の血を流し日章旗を樹てた所である。其れが東洋の平和と云ふ辭柄の下に還附し、未だ間もなき卅三年三月廿七日には、露國遂に清廷を脅迫威壓し、我が面目を蹂躙して、旅順口を事實的に占領した。尙卅三年清國内に義和團と稱へ拳法を練習する一種の迷信教徒の首領端郡王が、政治の實權を握りて俄かに勢力加はり、五月北京附近に於て暴徒

と變じて異教徒を殺害し電信鐵道を破壞し、進んで北京を包圍し我公使館書記生杉山彬、獨逸公使ケットレル外外人數名を殺害し、益〻暴威を振ひし爲め、我國は直ちに兵を出し、列國共同作戰の下に鎭壓したるが、露國は此の機に乘じて其利益範圍を擴張し、自國版圖を膨脹せしめんとの欲望を逞うし、名を草賊征定に假り、先づ西伯利亞步兵●コサック兵●砲兵●浦鹽斯德要塞兵●烏蘇里●黑龍江民兵●黑龍江●西伯利亞の二軍團を出動せしめ、本國よりは十二個の野戰病院を派遣し、之れを五軍に別ちて七月十四日から公然滿洲に討ち入つた。而して其の一軍は西伯利亞のハイラルより進み、愛琿ハイラルを占領し、二軍は西伯利亞ポーフアより進入して薩哈連、ヘルムホ、シンガリン、齊々哈爾を占領し、三軍はハバロフスクより攻擊してハルピンを攻略し、他の軍と聯合して呼蘭城を降し拉林を陷れた。四軍は浦鹽斯德及びパスシエニット灣より闖入し運春城を拔き、寧古塔を陷れ吉林を包圍して占領し、五軍は旅順より出て牛莊●遼陽●奉天●鐵嶺●新民●安東を攻略し、十一月には滿洲三省の全部を占領したが尙慊らず更に竿頭一步を進めて、韓國に向つて侵略を試るに至つた。是れ即ち淸國との公約、及び列國に對する保障を無視する不信の行爲であるのみならず、直接我が帝國の存在を脅威するものである。是に於て帝國政府は默する能は

ず、先づ至誠を披瀝して露國政府との間に交渉を開き、相互の利益を調和し、併せて東洋の平和を維持せんとして、協商の道を講じたるも、露國は毫も誠意を以て我を遇せず、徒らに曠日彌久して、以て交渉を遲延せしめ、其間に着々海陸の軍備を充實して、韓國の境上に蹤み、陽に我を威壓せんとする如き行動に出でたるを以て、國民の公憤は勃然として發し、輿論鼎沸、政府に向つて開戰を促し、三十六年の暮秋より、黑雲暗澹として滿韓の野を蔽ひ、風雲の去來頗る急であつたが、彼我の妥協は遂に成らず。翌三十七年二月八日我が驅逐艇は、旅順港に敵艦を夜襲して、最初の一擊を與へ、次で九日、我が艦隊の一部は木越旅團を護衛して、仁川に敵前上陸を行はしめたる後、同港外に敵の巡洋艦ワリヤーグ、コーレーツを擊破して、之を爆沈せしめ、戰端は終に開かるゝに至つた。

露國に對する開戰の理由は、二月十日を以て公布せられたる、宣戰の大詔に詳かである。

宣戰の詔勅

天祐ヲ保有シ萬世一系ノ皇祚ヲ踐メル大日本帝國皇帝ハ忠實勇武ナル汝有衆ニ示ス

朕茲ニ露國ニ對シテ戰ヲ宣ス朕カ陸海軍ハ宜ク全力ヲ極メテ露國ト交戰ノ事ニ從フヘク朕カ百僚有司ハ宜ク各〻其職務ニ奉ヒ其權能ニ應シテ國家ノ目的ヲ達スルニ努力スヘシ凡ソ國際條規ノ範圍ニ於テ一切ノ手段ヲ盡シ遠算ナカラムコトヲ期セヨ惟フニ文明ヲ平和ニ求メ列國ト友誼ヲ篤クシテ以テ東洋ノ治安ヲ永遠ニ維持シ各國ノ權利利益ヲ損傷セスシテ永ク帝國ノ安全ヲ將來ニ保障スヘキ事態ヲ確立スルハ朕夙ニ以テ國交ノ要義ト爲シ日暮敢テ違ハサラムコトヲ期ス朕カ有司モ亦能ク朕カ意ヲ體シテ事ニ從ヒ列國トノ關係年ヲ逐ウテ益〻親厚ニ赴クヲ見ル今不幸ニシテ露國ト釁端ヲ開クニ至ル豈朕カ志ナラムヤ

帝國ノ重ヲ韓國ノ保全ニ置クヤ一日ノ故ニ非ス是兩國累世ノ關係ニ由ルノミナラス韓國ノ存亡ハ實ニ帝國安危ノ繫ル所タレハナリ然ルニ露國ハ其ノ清國トノ明約及列國ニ對スル累次ノ宣言ニ拘ラス依然滿洲ニ占據シ益〻其地歩ヲ鞏固ニシテ終ニ之ヲ併呑セムトス若シ滿洲ニシテ露國ノ領有ニ歸センカ韓國ノ保全ハ支持スルニ由ナク極東ノ平和亦素ヨリ望ムヘカラス故ニ朕ハ此機ニ際シ切ニ妥協ニ由テ時局ヲ解決シ以テ平和ヲ恒久ニ維持センコトヲ期シ有司ヲシテ露國ニ提議シ半歲ノ

久シキニ亙リテ屢次折衝ヲ重ネシメタルモ露國ハ一モ交讓ノ精神ヲ以テ之ヲ迎ヘス曩日彌久徒ニ時局ノ解決ヲ遷延セシメ陽ニ平和ヲ唱道シ陰ニ海陸ノ軍備ヲ增大シ以テ我ヲ屈從セシメムトス凡ソ露國カ始ヨリ平和ヲ好愛スルノ誠意ナルモノ毫モ認ムルニ由ナシ露國ハ既ニ帝國ノ提議ヲ容レス韓國ノ安全ハ方ニ危急ニ瀕シ帝國ノ國利ハ將ニ侵迫セラレムトス事既ニ玆ニ至ル帝國カ平和ノ交渉ニ依リ求メムトシタル將來ノ保障ハ今日之ヲ旗鼓ノ間ニ求ムルノ外ナシ朕ハ汝有衆ノ忠實勇武ナルニ倚賴シ速ニ平和ヲ永遠ニ克復シ以テ帝國ノ光榮ヲ保全セムコトヲ期ス

彼の三國干渉以來、臥薪嘗胆して、陰忍十年、竊かに機會の到來を、待ちに待つた五千萬の國民は、踊躍して起つたのである。越えて同月十二日陸海軍大臣、並に各師團長を宮中に召されて、特に親しく左の優詔を下し給ふ。

勅語

朕ハ東洋ノ平和ヲ以テ朕カ衷心ノ欣幸トスル所ナルカ故ニ清韓ノ兩國ニ關スル時

局ノ問題ニ付朕カ政府ヲシテ昨年來露國ニ交渉セシメタリ然ルニ露國政府ハ東洋ノ平和ヲ顧念スルノ誠意ナキコトヲ確認セシムルノ止ムヲ得サルニ達シタリ蓋シ清韓兩國領土ノ保全ハ我日本ノ獨立自衛ト密接ノ關係ヲ有ス玆ニ於テ朕ハ朕カ政府ニ命シテ露國ト交渉ヲ斷チ我獨立自衛ノ爲メニ自由ノ行動ヲ執ラシムルコトニ決定セリ

朕ハ卿等ノ忠誠勇武ニ信賴シ其目的ヲ達シ以テ帝國ノ光榮ヲ全ウセムコトヲ期ス

二、動員・出征・行軍

宣戰の詔勅に先つこと五日即ち二月五日を以て全國の師團に動員の令下る。聯隊長小原大佐は直に將校を將校集會所に招集して、動員令を下達すると共に、各官の戰時職務を命じ、即刻動員に關する諸事務を開始し、同月十五日を以て完結した。

二月十六日將校並に同相當官に對して、特に拜謁を仰付けらる。楠正行が「あづさ弓」の故事など想ひ出で、何れも最後の參內を期して、各員大に感激す。

聯隊は第一軍(軍司令官陸軍大將黑木爲楨)に屬し、廣島に集中の爲め二月二十一日第一大隊を先頭として新橋を發し、輸送前後六回、二十四日全隊廣島に集合を終り、尙ほ他隊の集合を待合せたる上、三月十四日●十五日の兩日に亙り安藝丸外三船に分乘して宇品を出帆し、征途に就いた。黑木大將以下軍司令部は安藝丸に同乘し、各船は時を異にして航路に就き、帝國軍艦に警護せられて消燈航海を行ひ、十七日韓國鎭南浦に投錨したるも、當日は風波頗る强かつたので一夜を船に明かして、十八日より二十日に亙つて全部の上陸を終り、藝明附近に宿營す。二十一日此を發し平壤●順安●肅州等を經て六里洞に至り、此地に滯在すること九日間、行々道路の改修に任じつゝ進んだ。而して同地を發するに際り、近衞師團は二梯團となりて行進す。聯隊は第二梯團に屬し途すがら大寧●清州兩江の橋梁を修理し、或は砲兵隊の行軍を援助し、又道路の破損したるは改修を加へなどして進んだ爲め、行軍は意外に遲延して、四月十七日漸く師團集中地たる松長小水洞に到着するを得た。顧るに鎭南浦に上陸以來行路峻嶮にして到る處寒村僻地なる上に、地下の結氷は漸く融解して泥濘膝を沒し、殊に降雨一度至れば道路化して河流となり、忽ち獨流狂奔すると云ふ實情なるが故に、人馬車輛の行進は曾さへ遲延するが上に、砲兵隊及輜重隊等は步兵隊の援助に待つに非ざ

れば到底行軍を爲す事ができない。而して後方勤務は未だ完備せず、且人煙稀少にして徵發すべき物資にも乏しく、行軍と給養との困難は全く名狀すべからずである。而も一般に士氣振張せる爲に多くの患者を出すには至らなかつた。患者の多くは東京出發前及廣島滯在中忌むべき病毒に感染せる者にて、獨り吾が聯隊に止まりたる事ではないが、甚だ遺憾とする所である。

三、九連城附近の戰鬪

鴨綠江の渡河

初め我が軍は、北韓に於て少くも兩三回の戰鬪あるべきを豫期し居たるに、定州に於ける騎兵隊の小衝突の外、鴨綠江以南は双に衂ずして我が掌握に歸したので、將卒何れも髀肉の嘆に堪へず、堂々鴨綠江岸を壓して敵と對陣し、意氣大に振ふ。時に敵は左翼を遠く水口鎭の東北に張り、右翼を遙に安東縣の西南方に伸ばし、主力を九連城に集めて壘を高うし、溝を深くし、砲壘を築き、掩堡を造り、其の前哨は江を渡りて九里島●於赤島●中江臺●黔定島●蘭子島●上端洞●威化島に置き防備頗る嚴てである。近衛師團は元化洞の北九里島の

南に於て、敵前架橋を試みたけれども成就する事能はず、依て强行渡河をなして、架橋工事を防害する敵兵を掃攘するに決し、九里島占領の命が下つた。けれども是は第四聯隊專ら其の任に當り、當聯隊は四月二十六日宿營を義州東北方に移し、第一大隊を以て前哨となし、北部元化洞の西北高地に沿うて警戒に任ず。此戰役に於て聯隊が直接對敵行動を執りたるは、實に此の時を以て嚆矢とするのである。軍司令官は五月一日を以て鴨綠江右岸九連城附近の敵兵を擊攘すべき命を傳へた。乃ち聯隊は四月三十日夜十時三十分第二●第三●第一大隊の順次を以て宿營地を發し、五月一日午前一時二十分既に架橋したる鴨綠江の大軍橋を渡り、敵の防害を受くる事なく鑛河の支流を徒涉して、其の左岸に一連の掩壕を設け、鑛河の本流を挾んで敵に對し、前進の命令一下するを待受けた。

九連城の總攻擊

九連城は城砦の規模小にして堅固ならずと雖も、鑛河の長江は滔々として其東北を回り、鴨綠江に合して前面を橫斷し、香爐溝嶺は巍峨として其背後に聳え、湯山城●車輦館●鳳凰城の要害を控へ、西方は老頭山●通大溝●土城子の懸崖絕壁に限られ、東は長流を隔て、樂子園●虎山の險あり、更に北には腰溝●馬溝●楡樹溝●砲臺頂子等の諸山ありて、謂ゆる鄭

攻易守の地、特に露軍は既に數ケ月間を費して此天嶮に砲臺を築き掩堡を設けて居た。

此の時近衛師團は中央に位置して虎山の西北方に陣し、第十二師團は其の右翼に陣し、第二師團は左翼軍として黔定島に進み、左は威化島の西端より右は栗子園の北方に至るまで、戰線約六里一大灣形をなして鬚河に迫り、旗双霜の如く叢銃林の如く、六萬の皇軍整々肅肅、壯士慘として驕らず、恰も蔭曆の望夜に當りて、空には一片の浮雲なく、一面の明鏡皎として山野を照す。

既に夜は全く明放れて、七時を過ぐること十分、一陣の朝風に虎山の濛顏濛霧を拂うて顯るゝや、轟然一發我が近衛砲隊の砲聲に依て寂寞は破られ、敵の砲隊亦之に酬いて、玆に砲戰の序幕は切て落さる。續いて各方面に激烈なる銃聲起り、七時四十分を以て全軍攻擊に移つた。吾が聯隊は第二・第三大隊を第一線とし、第一大隊を豫備として、馬溝及腰溝一帶の防禦工事に據れる敵兵に當り、逐次前進しつゝあつた時、敵の砲兵は我が砲隊の猛射に堪へず、倉皇陣地を徹して退却を始めたる形勢見えたるを以て、聯隊は此の機を逸せず、敵歩兵の急射を冒し、鬚河の本流を亂して敵陣に突入した。

鬚河の本流は幅百二十米突に過ぎぬけれども、殘寒尙凛烈にして時々氷塊を流し、急湍

矢の如く、殊に平時より三割以上增水せしを以て、淺きも腰部を沒し、深きは頸肩に及んだ。然れば中には裸體となつて徒涉し、被服を着くるに遑なく其の儘、敵陣に突入したる勇卒もあつた。之と前後して全軍潮の如く三面より一齊に殺到し、敵も亦殊死して防戰し、玆に激烈なる白兵戰となりて屍山血河の慘鼻を極めたが、遂に左翼軍は九連城正面の敵を擊攘して摺鉢山を占領し、近衛師團は腰溝・馬溝・楡樹溝一帶の諸壘を奪取し、右翼軍は石城の敵を掃蕩して電光石火之を蛤蟆塘の胡盧谷に追ひ退げた。玆に九連城は全く陷落して、鬚河右岸の高地は悉く皇軍の有に歸し、旭旗翩翻として各所に飜り、天皇陛下萬歲、陸軍萬歲の聲は天地を震撼して起つた。

蛤蟆塘の激戰

聯隊は直に猛烈なる追擊射擊を加ふ。之が爲に特に退却する敵砲兵は隊伍全く紊亂して人馬の死傷甚しく、車輛を以て完全に自己の退路を杜絶するに至つた。次で聯隊は追擊命令を受けたるを以て、第二大隊を前衞として敵を擊退しつゝ前進したるに、敵の豫備隊たる歩兵一聯隊及砲兵一中隊は北部蛤蟆塘附近に據りて頑强に抵抗せるを以て、我が第一線部隊(第一大隊第二大隊)は全力を展開して猛烈なる射擊を加ふ。偶ま近衛第四聯隊の一部と第十二師

剛の主力とが左右より迫つて敵の退路を斷たんとする狀を示せるより、敵は却て死力を盡して惡戰せるも、衆寡素より支ふべくもなく、四時過ぐる頃遂に其歩砲兵は野砲十三門・機關砲八挺・死傷者約五百を遺棄して潰走し、殆ど殲滅に陷り、少數の殘兵のみが辛じて鳳凰城道及土城子指して退却するを見た。此日の戰鬪に依る聯隊の死傷は戰死者下士一、負傷者岡田少尉以下十四名であつた。

五月二日第一軍に勅語を賜ふ。

> 鴨綠江ハ敵ノ恃ミテ以テ天險ト爲ス所第一軍及ヒ之ニ參加シタル海軍支隊ハ計畫周到克ク其强行通過ヲ全クシ大ニ敵ヲ擊破セリ
> 朕深ク之ヲ嘉ス惟フニ爾後ノ掃蕩ハ勤勞倍〻大ナルベシ汝將校士卒奮テ勉勵セヨ

四、樣子嶺の戰鬪

九連城附近の大掃蕩、聯隊は赫家堡子・老爺廟附近に滯在し、六月二十三日此地を發して、

二十八日第一大隊(隊長三好少佐)は山砲二門を屬せられ、利浦嶺の敵を攻擊し激戰の後之を占領す敵の勢力は約二大隊即ち我に二倍して居た。西山少尉以下十六名の死傷あり。同時に第三大隊の一中隊は「パパン」嶺を占領した。最に於て聯隊は確實に此の兩嶺を守備し、樣子嶺の敵に對し警戒を嚴にして、之を監視しつゝあつた。

七月廿二日敵の歩兵約二中隊は我が前哨線に急襲して來たが、前哨第二中隊は第一中隊及第四中隊の一小隊と合して之を擊退し、敵は將校以下約四十名の死屍を遺棄して潰走した。斯く九連城占領後戰局遲々として展開せず、我が軍は約二ケ月間鴨綠江の右岸に膠着し居たるが如き狀を呈せるは、其の原因(一)地形險峻にして攻擊動作に不便なりしこと(二)適當の砲兵陣地なく爲に我が砲兵の威力を振ふ能はざりしこと等に在る。然るに第一軍前面の敵は七月中旬以降漸次其の勢力を增加し、同下旬には約四師團に達し、尙ほ陸續增加の模樣あり、且二十八日以來敵の動作は著しく活氣を帶び來り、將に我に對し攻勢に出でんとする形勢を示した。依て軍は斷然攻勢を執り、敵の準備未だ全からざるに先ちて、之を擊破するに決し、七月三十日楡樹林子及樣子嶺攻擊の令は下つた。

依て聯隊は先づ前哨線前の道路及砲兵陣地の構築に任じたる後、第一大隊を師團の豫備と

し、第二大隊は三十日夜十一時三十分前哨陣地を發して、三十一日拂曉五時より攻擊を開始す。此時第三大隊も之に合し、共に第一線となりて、猛烈なる敵彈を冒して前進したるも、我が砲兵は敵砲の爲に威壓せられ、加ふるに炎熱百度を越えて燒くが如く、敵は高地の堅壘に據りて瞰射を逞うするので、攻擊意の如くならず、辛じて「スウキテヤンザ」の部落を占領せるも、爾後斜坂急峻にして一歩一喘敵彈を避くるに由なし。從つて我が死傷續出し戰況容易に進まない。然れども不屈不撓の我が兵は益〻奮戰し、遂に「スウキテヤンザ」北方の高地端を占領した。此高地の喪失は敵の頗る苦痛とする所なるを以て、敵は屢〻逆襲に轉じ、極力我を驅逐せんと試み、爲に聯隊は甚しき苦境に陷つたが、將校以下殊死して守る。彼我相距る僅に數十歩、敵は漸く其勢力を增し、西北方の高地より我が左側に迫らんとする狀を示したる時、師團の總豫備たりし第一大隊の一部（本部及第一第二中隊）來援し、協力して敵の逆襲を沮止す。已にして日暮る。戰鬪準備の隊形の儘露營して拂曉を待てるに、敵は窃に陣地を棄てゝ退却した。依て直に第一大隊を第一線として樣子嶺に向つて前進し、毫も敵の抵抗を受くる事なく樣子嶺を占領し、楡樹林子方面も之と前後して我が軍に歸し、軍は遼陽の側面に位置するに至つた。

此戰鬪に於ける聯隊の損傷

△戰死　中尉白澤義見・清岡五郎。下士以下四十一名。

△負傷　大尉高田豊樹・鈴木新之丞・平尾熊藏・田原三之助・眞包與一郎。中尉山本松雄・津森恒。少尉西山重敬。下士以下百四十九名。

勅語第一軍に降る。

> 第一軍ハ嶮難ナル山地ニ在テ善ク各部隊ヲ律シ楡樹林子及樣子嶺附近ニ於ケル優勢ノ敵ヲ擊退セリ
> 朕深ク汝等ノ屢〻戰捷ヲ奏スルヲ嘉ス

五、遼陽の戰鬪

遼陽總攻擊開始

軍は八月一日を以て遼陽の外廓なる樣子嶺・楡樹林子を占領し、大孤山上陸軍は七月三十一

日已に柞木城を占領し、第二軍は八月三日を以て海城を占領し、三面齊しく陽遼を壓迫して滿洲南部の敵兵をば、悉く其の城内に追窮した。遼陽は鴨綠江の水源に蟠屈する長白山脈と、方二十哩に亘る遼河平原との交界線に接し、四通八達の要衝である。然れば敵帥クロパトキンが極東軍總司令官に任命せられて滿洲に到着するや、彼は第一期作戰の主陣地として、直に遼陽を選定し、日本軍を此處に邀擊せんと欲したのである。而して八月二十三日遼陽に據れる敵の實兵は總數十六萬砲六百門と算せられた。

師團は八月二十三日より前進運動を始め、聯隊は故障なく貨郎溝北方の高地を占領す、此日第一大隊の敵情偵察中今田中尉は將校斥候となりて貨郎溝北方に赴き、敵の狙擊に會て戰死す。第三大隊は師團の總豫備に充てらる。聯隊は更にサンプニー南方高地を占領して工事を施す。二十五日第三大隊はキミンズイ西北方高地の敵を攻擊して、之を占領し、其の夜は獨力を以て三面の敵に對抗しつゝ、完全に此の高地を維持す。二十六日第二大隊は第二師團の左翼に增援し、午後三時半よりサンプニー北方高地の敵陣を攻擊し、同五時終に之を驅逐す。時に第一旅團は敵の包圍を受け戰況頗る急を告ぐるものあり。由て同大隊は暗夜を利用して大西溝に達し、第一旅團長淺田少將(奥信)の令下に入り、激戰奮鬪敵を

擊退したる後二十七日夜を以て聯隊に復歸した。二十八日は、聯隊は「ハオツイゴー」にて若干の戰鬪の後敵を徐家溝方面に驅逐し、引續き四方臺を占領して、同夜は同地に宿舍し、次で記憶すべき徐家溝の戰鬪は起つたのである。

徐家溝の激戰

第一大隊長戰死し第三大隊長負傷す

二十九日聯隊は敵の抵抗を受くる事なく徐家溝南方高地線を占領し、夜間に乘じ陣地の構築を行ふ。敵は我と一大谷地を距つる高地上に防禦工事を施しつゝあり、將に起らんとする快戰を豫期して、將卒の士氣大に振ふ。三十日拂曉より師團は攻擊運動を開始し、後備歩兵一大隊(後備歩兵第二十九聯隊第二大隊)吾が聯隊に屬せられ、徐家溝北方高地の攻擊に任ず。乃ち聯隊は第二大隊を左翼に、第一大隊及後備大隊を以て第一線とし、第三大隊を豫備隊に充てゝ攻擊に着手し、午前十一時三十分より敵と戰鬪を交へ、一時間にして徐家溝北端一帶の線を占領し、高地上の敵を仰いで激烈に交戰す。敵は好陣地に據り我を下瞰して猛烈なる急射を加ふるを以て、我が死傷算なく、忽ちにして屍山血河の慘況を文字通りに現出したるも、第四中隊及後備兵の第八中隊が、戰友の死屍を躍越えて猛進し、遂に高地の中腹なる第一線堡壘を强奪するや、士氣益〻振ふ。由て此機を逸せず豫備隊たる第三大隊を後備大隊の

右側に增加した。茲に於て戰鬪は益〻激烈となり、新鋭第三大隊の一部と後備兵大隊とは死力を盡して又も敵壘の一部を奪取し、戰況は益〻激烈にして愈〻苦戰を極む。聽て師團の總豫備たりし後備兵一大隊も吾聯隊の戰線に送られた。然れ共此時死傷相續き彈藥も亦頗る缺乏せるに引替へ、敵は却て兵を他方面より此に集中し、防守愈〻頑强に動もすれば攻勢に轉せんとする勢を示し、特に敵砲兵隊の砲擊最も猛烈にて、爲に天蹙し地撼き、抹雲俄に布き、猛雨沛然として來り日亦暮る。聯隊は士氣を鼓舞して依然最大苦戰を繼續し居たるも、命令に由り夜陰十一時風雨の下を奮陣地に後退し、一大谷地を挾んで此陣地を嚴守すること二晝夜、敵の砲兵は絕えず我が陣地を搜射しつゝあつた。九月一日未明我が砲火を猛注したるも、敵は應射しない。乃ち敵は夜暗其の陣地を棄てたのである。聯隊は直に徐家溝北方高地を占領す。此の戰鬪は遼陽會戰中の最激戰にて、當聯隊の發射彈數は一銃最高七百發を算し、第一大隊長三好少佐戰死し、第三大隊長松前少佐は負傷し、其他將卒の死傷五百六十四名に達した。

九月一日優渥なる　勅語は滿洲軍總司令官に降る。

滿洲軍ハ克ク諸軍ヲ糾合シ各路齊シク防備堅固ナル敵ヲ擊退シ終ニ之ヲ遼陽ニ壓セリ　朕其勇武ヲ嘉ス以來日夜激戰ヲ繼續スルヲ聞キ深ク其勞苦ヲ懷ヒ轉タ軫念ニ堪ヘス　朕ハ爾將卒ノ勇武ニ信賴ス爾將卒其レ益〻奮勵セヨ

遼陽の陷落

九月二日より三日に亙りて、吾聯隊は虎頭崖西方より高麗蔥の守備線に就き、工事を施し、只管遼陽攻擊の時機を待つ。

軍の主力は遼陽東北側に於て敵の退路に迫るの計畫に基き、聯隊は四日午前三時守備地を發してチユジヤトンに急進し、午後九時目的地に到着して宿營す。此日の行程十三里、炎暑酷烈、而も河川を徒涉すること十餘回に及んだ。翌五日午前四時此地を發し双廟子の軍橋を渡り午前十一時「ルウジヤフアン」に着く。此の行軍中遼陽陷落の通報に接したのである。爾後聯隊は「シアンワゴズイ」附近に宿營し、十月一日連連溝附近に移つて堅固なる陣地を構築し之を守備しつゝあつた。

遼陽戰に於ける死傷者

△戰死　少佐三好兵介。大尉今田三四郎。中尉河野通義・橋島茂・鶴島次郎。准士官三名。下士以下七十七名。

△負傷　少佐松前正義。大尉田原三之助　久米雄太郎・貞包與一郎・嶋口新次　中尉小倉千三。少尉母袋忠男・竹内平三郎・藤本林三郎・黒田平三郎・鶴井寒作・別府純一郎。准士官二名。下士卒五百三十八名。

六、沙河老君峪の戰鬪

露軍が遼陽に破るゝや、奉天を以て根據地となし、遙に遼陽の我が軍に對しつゝあつたが、遼陽戰に於ける損傷が意外に輕微であつたのと、新に第一軍及西比利亞第六軍團の來着に由り、露軍の戰鬪力は寧ろ遼陽戰當時に比して增加し、優に日本軍を凌駕し得るを確信したると、又他面には本國に於て總司令官クロパトキン將軍に對する非難の聲漸く高からんとする事情もあつて、敵は終に斷然攻勢を取るに決し、續々南下の運動を開始し、殊に本溪湖の我が守備薄弱なるを看破し、大擧して本溪湖・大嶺士・門子嶺の前に來襲し來り、我が軍傾る勇戰したるも戰況刻々不利に陷り、兜山及桂山の防禦線は一時悉く敵の占領する所となり、軍の左翼に在る梅擇旅團は頗る苦戰の狀に在つた。

十月十一日午前三時、聯隊(第三大隊を缺く)は老君峪西方高地に向つて運動を起し、同六時卅分遂に小原山(吾が聯隊の苦戰奮鬪せる地方なるに由り齊く命名せらる)の一線を占領した。然るに敵の歩兵は續々吾が正面に現はれ八家子附近の敵砲兵は盛に吾が聯隊を砲擊し、加ふるに敵の騎兵は我が陣地の左側に襲擊し來るなど、終日戰鬪を絶たず、日沒に至つて銃聲纔かに熄む。此の時總司令官より一の訓令下る。曰く

本夜ニ於ケル第一軍ノ行動ガ目的ヲ達シ得ルト否トハ日本全軍ノ運命ヲ左右スベキヲ以テ各長官ハ萬難ヲ排シテ成功ヲ期セラレムコトヲ熱望ス

と。將卒之を聞いて胸中大に決する處あり。聯隊は敵陣强襲の命を受けて、十二日午前三時第二・第三大隊を第一線とし(第一大隊)小原山の頂界線及其の西方斜面の陣地を發して、敵の猛射にも應せず、一擧して拔かんものと果敢なる突擊を決行したが、徒に損害を受くるに止まつて功を奏せず、敵は益〻兵力を增加し射擊は愈〻激烈を加へ、先頭兩中隊長を初め死傷算なき有樣である。仍て第三大隊の右翼に在て、敵の猛烈なる砲射を受けつゝ急峻突擊命令を待つた。第二大隊は第三大隊の右翼に在て、一時敵彈を遮蔽し隊伍を整頓して、最後の斜面を攀登して突擊を行つたが、敵は稜線後の散兵壕に據て爆彈を投じ、石礫を拋つ

など頗る頑強に防戦し、流石に勇敢なる我が將卒も容易に近づき難く、死傷算なく光景酸鼻を極めた。雖然我は更に屈せず尚も數回の突撃を断行し、各個に敵陣に突入して相格闘する迄に至つたが、依然功を奏せず、鉢卷山方向より不意の縱射を受けて、夥しき損傷を蒙り、一時谷地に降りて殘兵を糾合し、第三大隊及第一大隊の一部と協力して反覆勇猛なる突撃を斷行し、四時丼分に至つて遂に此の頑強無比の剛敵を驅逐して、其の陣地を奪取し、敵は我に三倍する屍體を遺棄して退却した。此の戰闘は實に壯絶慘絶を極め、彼我の死屍は一連の散兵壕を界として、或は相刺し或は敵を斬殺して斃るゝもあつた。此の戰闘に於ける吾が聯隊の死傷は、實に將校以下四百五十名を算して、徐家溝に次ぐの激戰であつた。

續て天漸く明くるを待て、更に追撃射撃を加へて多大の損害を與へたる後、午前七時八家子に集合す。

十三日午後二時花勾嶺を守備せる第一大隊の正面に敵歩兵約一個聯隊來襲し來りたるも、我が敢射に會して退却し去つた。爾後敵は遂に遼陽恢復の目的を達せず、逐次我が追撃を受けつゝ北方に退却して、沙河右岸に停まつた。

七、沙河の冬營

沙河會戰の終局は判然たる境涯なく、我は守勢より攻撃に轉じて戰線數里を進めたるに依て勝者の地位に立ち、敵は攻勢より守勢に變じて數里を退却したるに依て敗者の地位に立ち、兩軍河を挾んで相對峙する事となつた。而して露軍の戰死者は一萬二千、負傷者は五萬五千八百と註せられ、我が軍の死傷は合計一萬五千八百と發表せられた。

十月十六日優詔滿洲軍に降る。

> 我滿洲軍ハ敵軍新鋭ノ增援兵ヲ得テ大擧攻撃シ來ルニ對シ機先ヲ制シテ逆撃シ激戰數日多大ノ損害ヲ與ヘ遂ニ之ヲ沙河以北ニ潰走セシメ全ク其企圖ヲ挫折セリ
> 朕深ク爾將卒ノ忠勇克ク連日ノ勞苦ニ耐ヘ偉大ノ功績ヲ奏シタルヲ嘉ス

是より先、聯隊は尖山より金鐘山に亙る間の警戒に任じ、日夜防禦工事に從うた。此の間敵は屢ゝ我が正面に現るゝと雖も、戰闘を交ふるに至らず。一週日の後此の地を第一旅團

に讓りて馬耳山附近の守備に就いた。爾後各隊は夜を日に繼いで極力防禦陣地の構築に努めたるを以て、奉天會戰の頃には殆んど假備築城の觀を呈するに至つた。而して聯隊が馬耳山の守備に當りし頃より、天漸く寒威加はり、河●沼及地上に氷結を見る。然れば各隊は陣地及宿營地、構成の爲に一層の勞力を費し、只管冬營の設備に努めた。冬營中は各種の演習に從事し、師團の競爭射擊なども施行せられて、來る可き大會戰の準備をさをさ怠りなかつた。此の間に近衛歩兵第一旅團長淺田少將は中將に進み、長谷川中將に代つて近衛師團長に任ぜられた。

沙河戰に於ける死傷

△戰死　少佐佐藤義德。大尉關口信次・岩谷茂・小山條・山内健三。中尉小倉千三。少尉黑田平三郎・山口寛治。准士官三名。下士卒一五〇名。

△負傷　大尉加藤正純・久米德太郎・戸川柳吉・田村重。中尉菅川綏・山本松雄。一等軍醫兩部繁。少尉機部民彌・巻山茂松・河村勘市・別府純一郎・田中準・井上智照・七五三龜吉・鈴山松次郎。准士官四名。下士卒四〇九名。

八、奉天戰の序幕

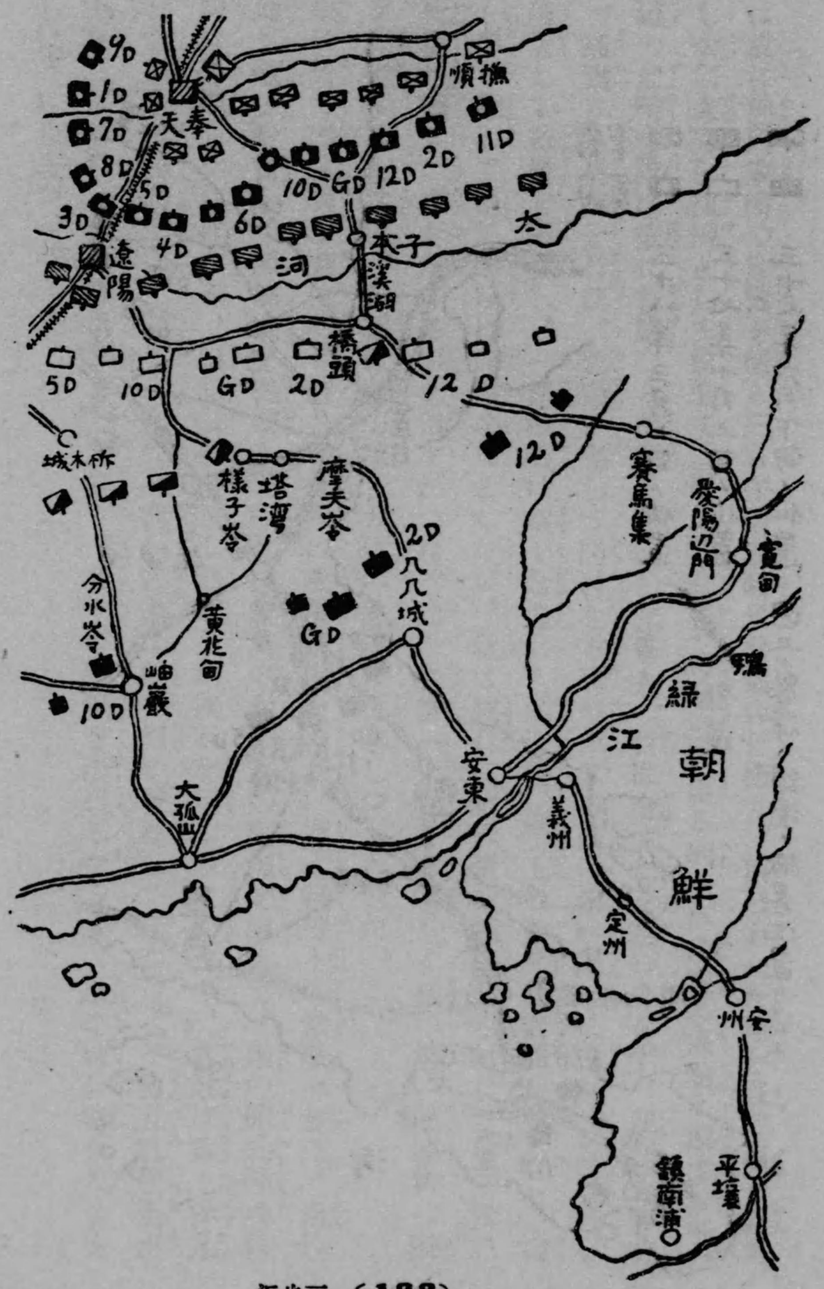
渾家の氷結漸く解けんとして、風雪尙滿洲の野に滿つ。沙河の會戰後茲に五ケ月、日露兩軍は沙河●渾河の間に對峙して、蜿蜒五十里に亙り堡壘を高うし塹壕を深くして互に守備を嚴にし、滿を持して發せず戰機の熟するを待ちつゝあつた。而して兩軍の兵力は漸次增加し來り、今や彼我を合して八十餘萬、砲亦二千五百門を超ゆ。此の間嚴冬極寒の裡に在りて、彼我の小衝突は絶ゆる日とても無かつたが、稍〻大なるものは我軍の歪頭山占領、敵騎の牛莊來襲、黑溝臺附近の會戰等で、冬期方に去らんとして戰機は徐々に動き初めたのである。乃ち野津軍を中堅と爲し、黑木軍其右に連なり、奥軍は其左に續き、川村軍は黑木軍の右に接し、乃木軍は奥軍の左に亙り、大規模の包圍作戰を以て二月二十五日より運動を起した。聯隊は二十五日馬耳山の陣地を徹して前武家溝より狄々山東北方騎兵山に亙り攻擊陣地を占領して工事を施す。時に寒氣尙ほ未だ烈しく、地面全く氷結し、加ふるに晝間は敵の砲擊を受くるより、專ら夜間を以て工事に從事せるが故に、寒氣は更に强く工事も亦頗る困難を極めた。然るに我が陣地の直前に姚千戶屯と呼ぶ部落があつて、敵兵之を守備せるが故に、先づ此敵を擊攘するの必要を認め、第一大隊長（少佐佐藤房藏）に部下大隊と第十一中隊を授けて之を攻擊せしめた。仍ち同隊は廿五日午前八時四十分騎兵山を發し、

部落の西南端に向つて夜襲を試む。雖然此の正面は繞らすに堅固なる圍壁を以てし、守兵は其銃眼より猛烈に射撃し、加ふるに突如として左側より我を急射するあり、兵力亦時々刻々増加し來つて、攻撃遂に奏功せず。斯かる間に天命も既に近づいたので、同隊は攻撃を中止して引上げた。二十六日の午後、暗澹たりし凍雲は終に雪と化り飛雪粉々、天地冥濛、咫尺を辨せず。此日は各方面共に激烈なる戰鬪は無くて暮れた。

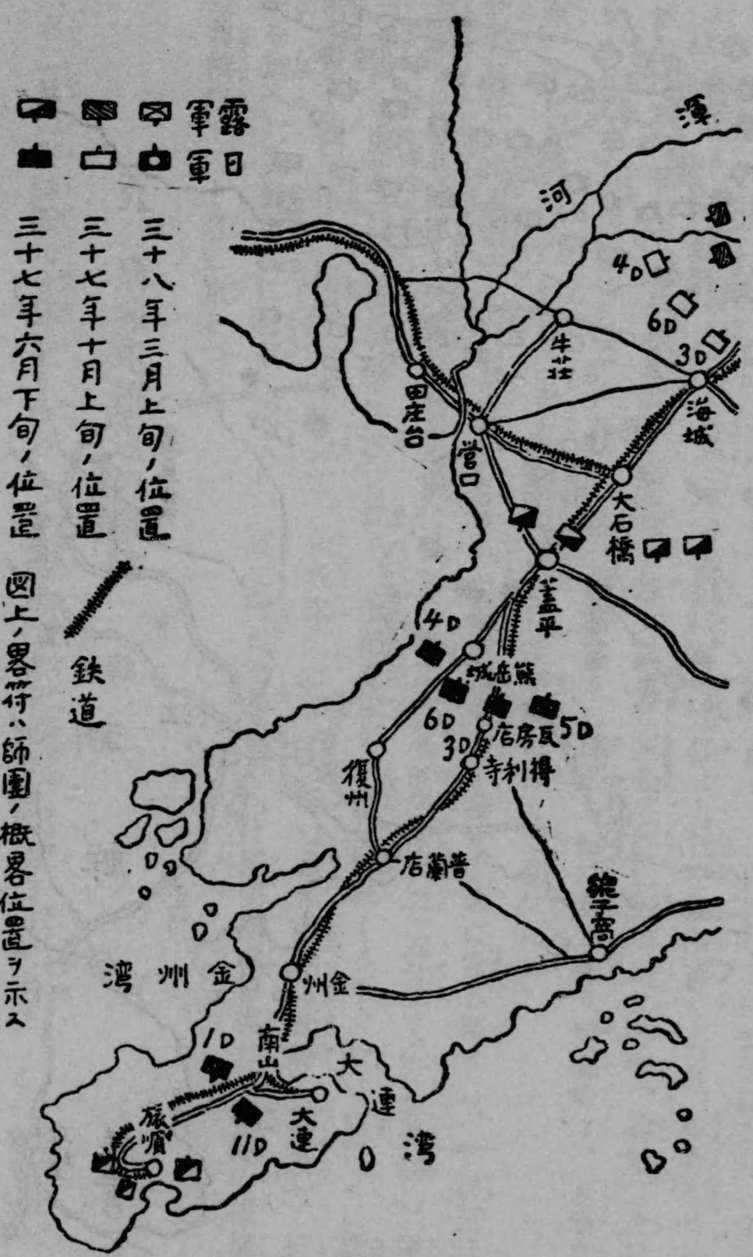
再び姚千戸屯占領の命令を受け、二十八日聯隊は全力を擧げて之に當る事とし、午前三時運動を開始し、第一大隊を以て本攻に任じ、第二大隊（隊長少佐大和新輔）は左側より敵を牽制し、第三大隊（隊長少佐松前正義）は右翼に在て掩護に從ふ。牽制部隊が射撃を開始するや、敵は直に之に應射し全く我が術中に陷りたるを以て、本攻隊たる第一大隊は直に敵前近距離に肉薄して猛射を加へたる後勇猛に村落へ突入し、遂に陣地を奪取し尚ほ捕虜四名を得た。聯隊の損傷は將校以下二十名に止まつた。

九、唐家屯附近の激戰

三月二日の夜師團司令部より命あり、其聯隊は唐家屯北方高地を占領すべしと。乃ち聯隊



一般圖



は直に前武家溝の守備を徹し三日午前零時卅分集合を終り、第三第一大隊を以て第一線とし第二大隊を豫備として前進す。第一線大隊が唐家屯を距る約一百米突の地點に達するや、敵の前哨部隊は俄に急遽なる射撃を開始したるも、我は毫も之を意に介せず、第三大隊先づ猛烈なる突撃を行ひ、敗敵に尾して同村北方高地上なる敵の第一陣地に迫り、副防禦を破壊して敵壘を突破し、一部の者は益〻急追して遂に稜線上の散兵壕數個を奪取し、尚も勢に乘じて第二陣地に肉薄せんとしたが、是は流石に敵の銃砲彈急雨の如くにして我が死傷相繼ぎ、志を達する事を得なかつた。此の時第一大隊も亦等しく敵の第一陣地の一部を强奪すると共に、左翼に在て第三大隊の掩護に從事しつゝあつた。

茲に於て志波聯隊長は勇を鼓して全隊に攻撃前進を命じ、逐次稜線上の敵壘を奪ひ、雨の如き敵彈を冒して鐵條網を破壊し、一部は脱兎の如く其の間隙を越えて、敵の砲兵陣地に向け驀進したけれども、斜面急峻にして地形上集團兵を用ふるに適せず、且敵は益〻彈丸を急射し爆彈・照明彈の類を亂投し、我が死傷は刻一刻と增加して行つた。午前五時近衞歩兵第二聯隊の一個大隊增援として來り、共々に突撃を決行したるも、是亦只損害を大ならしむるに止まつた。

天明既に近づく。各隊は夫々占領せる第一陣地を固守するに決し、全力を盡して其改修に從事したが、工事頗る不完全なる上に、陣地は敵の第二陣地を距る僅に四・五百米突にして、多くは敵の瞰射・縱射意の儘なれは、天明以後は我が損害更に甚しきものがあつた。加之陣地の後方は二千米突計りの開濶地なるが故に全く敵の掃射に委ね、後方との連絡杜絶して、聯隊は殆ど孤立の姿となつた。五日朝敵の大部隊は一大逆襲を企て、特に其の約一個大隊は驚く可き神速なる行動を以て、我が潛伏斥候に尾して聯隊の陣地に突入し來つたが、守兵は搭鬪力戰して之を防ぎ、敵は將校以下十數の屍體を遺棄して潰走した。

爾後小逆襲は殆ど日課的に行はれたるも、我は常に之を擊退し、優勢なる敵と近距離に相對峙して占領陣地を守備するもの實に四晝夜。七日敵は赤十字旗及白旗を樹てゝ死傷者の收容を開始したるのみならず、展望哨の報告に由れば『軍隊の運動・車輛の往復俄に頻繁を極め、敵情動搖の徵あり』と。果して同夜敵は遂に北方に退却し去つたので、取敢ず一中隊をして唐家屯石山を占領せしめ、翌八日早朝聯隊は唐家屯北方高地の占領を確實にした。此の戰鬪に聯隊の損傷は七百廿七名に上り、第三大隊長松前少佐は三日の戰鬪に再度の負傷を爲し、岩田少佐(恒)之に代る。

三月八日　優詔滿洲軍に降る。

> 我カ滿洲軍ハ客冬沙河激戰以來銳ヲ蓄ヘ妄ニ動カス以テ戰機ノ熟スルヲ待チ一度意ヲ決シテ起ツヤ全線活動敵ヲ壓迫シテ既ニ能ク包圍ノ形ヲ占ム
> 朕ハ捷報ノ至ル毎ニ我カ戰勢ノ益〻佳境ニ進ムヲ擇ヒ又汝將卒餘寒尚ホ酷烈ノ時ニ於テ數晝夜ニ亙ル艱苦ヲ察シ軫念太タ切ナリ其レ各〻自愛シテ耐久ノ勇ヲ養ヒ光輝アル攻積ヲ奏シ以テ朕及ヒ朕カ億兆ノ信賴ニ答ヘヨ

全軍の士氣益〻振ふ。

十、追擊戰に敵の軍旗を奪ふ

八日朝唐家屯北方高地の占領後、聯隊は師團右翼隊の前衛となりて午前九時同地を出發し、前斗子峪を經て大常王寨に向つて前進(第一大隊は右側衛として白礫塞・三家子を經て進む)し、敵を追躡しつゝ午後四時臺勾北方の無名部落に達したる時、敵の歩兵約一個聯隊が沙河子附近を西北に向つて退却す

吾が聯隊蒲河附近に於て敵軍の軍旗を奪ふ

るに會した。仍て聯隊は直に大常王寨西方高地に展開して、友軍の砲兵と共に急射擊を加へて側擊し、敵をして全く潰亂に陷らしむ。此の夜は大常王寨附近に露營して、翌九日午前五時半此を發して紅旗勾大臺を經て王大人屯に向ひ、渾河の左岸に達するや、敵砲兵射擊を受けたるも、强烈なる朔風黃塵を卷いて空を鎖し、天日爲に暗く、我に一の損傷だも無かつたのは、謂ゆる天祐乎。聯隊は渾河の流を亂して右岸に上り、舊站に進入すれば、村内には敗兵の遺棄せる兵器材料等狼藉を極めて居る。

十日聯隊は追擊隊の本隊に屬し『シャング』勾附近を經て三窪に向つて前進中敗退する敵の縱隊を衝いて潰亂せしめ、午後四時達連堡子の敵を擊攘して之を占領し、更に蒲河潘家臺附近を退却中なる敵の大縱隊に向て猛烈なる側射を浴せた。敵の狼狽は誓ふるに物なく、車輛及諸材料を遺棄して西北方に潰走す。聯隊は此機を逸せず猛烈神速なる追擊を加へ、午後五時四十分全く蒲河附近を占領すると共に、敵の軍旗一旒を鹵獲した。（爲に司令官より感狀を授（第五章參照））十一日午前五時我が第九中隊は第十師團との連絡の爲め「チエンチユツフー」の東北三千米突の地點に達せる時、同地に露營せる我が砲兵彈藥縱列が敵の來襲を受けつゝあるに會し、直に之と力を協せて防戰に從ひ、遂に其の優勢なる敵を擊退した。

又午前六時半頃敵の步兵三・四大隊は達連堡子に逆襲して來たが、聯隊の一部は附近の友軍と共に邀擊して、全く之を降伏せしめ多數の捕虜を獲た。十三日は一日を隊伍の整頓と戰利品の整理に費したる後、後牙子下寺に到りて宿營し、十四・十五兩日は同地に滯在休養し、十六日は先づ聯隊集合地たる王河家子に到り、是より旅次行軍を以て鐵嶺に向ひ、同夜は遼海屯に十七日夜は陳千戶屯に宿營す。此の時敵は已に遠く長春方面に退却し、殊に師團は第二線に廻されたる爲め、爾後復た對敵動作を執る機會は無かつた。

十九日「スーリンザ」附近に宿營を移し、久しく同地に舍營する事となつた。

奉天戰は露軍に對して全く事實上の致命傷を與へたるものにて、渠は此の一戰に十六・七萬人の戰鬪力を減殺し、物質的に打擊を受けたるの外、精神的に癒す可からざる大負傷を爲し、遂に和を我に請ふに至つたのである。我が滿洲軍の死傷も亦五萬人に上つた。

奉天戰に於ける我が聯隊の死傷

△戰死　大尉江橋貞一・三浦良光。中尉畠元正武・井上智照・今井七郎・少尉柳田與吉・上田友司・山市幸藏　准士官四名。下士卒百二十五名。

▽負傷　少佐桜前正義。大尉村岡五萬治。中尉春山茂松・日下部道禮・筒井嘉作・堀内貫一郎。少尉金野武雄・赤岡運藏・柳井國太郎・久保德次・富岡義榮・伊藤部平吉・和田新次郎・中澤茂平治・准士官十名。下士卒六百四十三名

三月十三日滿洲軍に降れる勅語

奉天ハ客秋以來敵軍此ニ鞏固ナル防禦工事ヲ設ケ優勢ノ兵ヲ備ヘ必勝ヲ期シ衝ヲ爭ハントセシ所ナリ我滿洲軍ハ機先ヲ制シ驀然功進瓦寒氷雪中力戰健鬪十餘晝夜ヲ連ネ遂ニ頑强死守ノ敵ヲ擊破シ數萬ノ將卒ヲ虜ニシ多大ノ損害ヲ與ヘ之ヲ

鐵嶺方向ニ驅逐シ曠古ノ大捷ヲ博シ帝國ノ威武ヲ中外ニ發揚セリ

朕深ク爾將卒ノ能ク堅忍耐久絶大ノ勳功ヲ奏シタルヲ嘉ス尙ホ益〻奮勵セヨ

此戰鬪に於て當師團は大山總司令官より感狀を授與せられたが、吾が聯隊の之に與つて力ありしことは、感狀中に明らかである。

感狀

近衛師團

敵ヲ追擊シテ渾河右岸ニ進出シ更ニ三窪方向ニ轉進シ退却スル敵兵ヲ要擊シテ之ヲ潰亂ニ陷ラシメ就中近衛歩兵第三聯隊ハ潘家臺同第四聯隊ハ三窪附近ニ於テ敵ノ軍旗各一旒ヲ鹵獲セリ

其功著大ナリト認ム依テ感狀ヲ附與ス

明治三十八年三月十四日

滿洲軍總司令官　侯爵　大山巖

十一、平和克復と勅諭

奉天攻略後、諸軍齊しく馬驅北進して鐵嶺を越え、敵を昌圖以北に壓迫して相對峙した。聯隊は三月十九日樹林子（千佛庄）常舖屯附近に營營地を定めて、五月五日迄此の地に滯在し、次て大旬子附近に移り、我が師團が第二軍に編入せらるゝに及んで、更に腰堡小塔子附近に轉じ、又八寶屯・大灣屯附近に移つた。各宿營地に於て吾が聯隊は常に宿營の完美と清潔に勉めたる爲め、八寶屯の如き一時腸チブスの流行猖獗を極めたるに拘らず其の被害は甚だ輕微であつた。又日夜諸種の演習及教育に從事し、將卒共に益〻精神の修養と武技の琢磨とに努力したのである。

此の間米國大統領ルーヅベルト氏は、日露兩國に媾和を勸告し、兩國共に其好意を容れ、我國にては小村壽太郎伯爵、露國よりはウキッテ伯爵、米國ポスマウスに赴き、同所にて媾和談判は開始せられたのであるが、戰線に在る軍隊は唯進んで敵を殲滅するを知つて、其の他を知らない。相變らず孜々として前進の準備と防禦との手段に聊かの油斷もなかつた。一方媾和談判は圓滿に進捗し、九月八日遂に軍司令官より休戰の通告を受けた。

即ち媾和談判の結果は、露國は韓國に於ける我帝國の優勝權を承認し、滿洲に於ける撤兵南滿洲鐵道及樺太島の南半部を我に割讓する等、我國は多數の利益を獲得したる外、此一戰に依り、一躍して世界一等國の班に列し、國基之に由りて益〻堅く、國運之に由りて彌〻進み、實に建國以來の最大光榮を擔ふに至つたのである。而して我國は之が爲に、支拂へる犧牲は幾何ぞと云ふに、

人員　約十二萬人（死亡又は服役免除約十一萬八千人、俘虜となりたるもの約二千人）

馬匹　三萬八千三百五十頭

艦船　九十一隻（軍艦十二、水雷艇、假装砲艦及閉塞船二十五、運送船及雜役船五十四）

戰費十五億二千三百二十萬圓（陸軍　十二億八千萬圓、海軍　二億四千萬圓）

茲に於て全く敵對行動は中止せられ、次て十月十六日平和克復の令達と共に、左の勅語を拜す。

勅諭

朕カ親愛スル帝國陸海軍人ニ告ク

朕嚮ニ汝等ニ示スニ軍人ノ精神タル訓規五箇條ヲ以テシ明治二十七八年戰役終ルヤ深ク邦家ノ前途ヲ念ヒ更ニ汝等ニ諭示スル所アリ爾來十閱年朕カ陸海軍ハ世界ノ進運ニ伴ヒ經校大ニ其ノ步ヲ進メタリ不幸ニシテ客歲露國ト釁ヲ啓キシヨリ汝等協力奮勵各其ノ任務ニ從ヒ籌畫宜シキヲ得攻戰機ヲ制シ陸ニ海ニ曠古ノ大捷ヲ奏シ帝國ノ威武ヲ宇內ニ宣揚シ朕カ望ニ副ヘリ

朕ハ汝等ノ忠誠勇武ニ賴リ出師ノ目的ヲ達シ上ハ祖宗ニ對シ下ハ億兆ニ臨ミ天職ヲ盡スコトヲ得タルヲ懌ヒ深ク其戰ニ死シ病ニ斃レ又ハ瘢痍ト爲リタル者ヲ悼ム

朕今露國ト和ヲ媾ス惟フニ我軍ノ名譽ハ帝國ノ光榮ト共ニ更ニ汝等ノ責任ヲ重カラシメ國運ノ隆昌亦汝等ノ努力ニ俟ツコト大ナリ汝等夫レ能ク朕カ意ヲ體シ留リテ軍隊ニ在ル者ト散シテ鄕閭ニ歸ル者トヲ問ハス常ニ朕カ訓諭ヲ服膺シテ朕カ股肱タルノ本分ヲ守リ益〻勵精以テ報効ヲ期セヨ

十二、凱旋

十一月二十二日　聯隊は凱旋の途に上る。乃ち其の經過を表示すれば

十一月二十二日●二十三日　宿營地を發し鐵嶺附近に舍營す。

二十四日●二十五日　鐵嶺停車場出發、翌日大連着。

二十八日正午　聯隊の主力は鎌倉丸、第三大隊の一部は多聞丸にて大連を解纜す。

十二月二日午後　宇品港上陸。

二日—五日　廣島驛を發車し五日より八日に亙りて品川驛到着。

即ち約二ヶ年滿韓の野に奮戰力鬪し武名赫灼たる我が聯隊は十二月八日を以て、光輝ある凱旋を終つたのである。翌九日第一軍司令官黑木大將參內して具に戰爭の經過を奏上したるに、大元帥陛下には畏くも優渥なる勅語を賜つた。

是より先聯隊は廣島より東京に向けて汽車輸送中、十二月四日復員の命に接し、同九日を以て復員第一日とし十二日に至り全部完了した。

十三、陸軍凱旋大觀兵式

四月三十日　明治天皇には全國諸隊を東京に召集せられ、青山練兵場に於て、武勳赫灼たる凱旋軍の軍容を親閲あらせらる。乃ち聯隊は全員參列の光榮に浴す。當日には午前八時三十分宮城御出門、鹵簿第一公式にて練兵場に成らせられ、御先着の東宮殿下各宮殿下に御對顏の後、內外使臣に謁を賜ひ、後鳳車を進めて普く御閲兵あり。玉座に御駐蹕あるや、軍樂隊行進曲を奏し、各隊は逐次分列式を行ふ。近衛師團は實に前序列の先頭に在つて、更に數層の威容を添へて見えた。終つて玉音朗かに左の勅語を賜はる。

勅語

朕茲ニ凱旋軍ヲ集合シテ親シク觀兵式ヲ擧ケ軍紀大ニ振ヒ隊伍克ク整フヲ認メ深ク之ヲ懌フ汝等益〻奮勵シ以テ帝國陸軍ノ發達進歩ヲ期セヨ

諸兵指揮官元帥大山巖、謹んで之に奉答して曰く。

陛下茲ニ凱旋軍ヲ親閲アラセラレ特ニ優渥ナル勅語ヲ賜フ　臣等感激ノ至リニ堪ヘズ益〻奮勵努力以テ聖旨ニ副ヒ奉ランコトヲ期ス　臣巖凱旋軍ヲ代表シ謹テ奉答ス

諸兵指揮官　元帥　陸軍大將　侯爵　大山巖

此の隊列に入るもの、舊第一第二第三第四、及び舊鴨綠江軍司令部を始め、十七箇師團の代表隊にして、特に近衛・第一の兩師團は、全員參列の光榮に浴し、其の總員三萬一千二百三名(將校二二、一二四、士卒二九、〇七九)、將校以下盡く改正軍裝を以てし、儀一層の壯觀を極めた。大元帥陛下には、御機嫌殊に麗しく、龍顏晴れやかに宮城に還幸あらせられた。方に是れ前古未曾有の大捷を博し、國威八紘に顯揚し、新勢力宇內に光耀するの時、眞に曠古の一大盛典と稱すべく、國民の忠誠を極度に發揮したりし大戰史は、茲に全く其の結末を告ぐるに至つたのである。

各隊は練兵場にて晝餐を認めたる後、建制順に依り、大横町より青山通りに出て、赤坂見附・三宅坂・半藏門・竹橋門を過ぎて、和田倉門より凱旋道路を經、日比谷公園に到る迄、凱旋行軍を行つた。其の盛んなる、先頭既に解散するも、後尾は尙ほ青山練兵場を出でなかつた。尙此日二重橋前芝生には、各種の戰利品を陳列して、行還幸の途次、天覽に供し

奉つた。

十四、戰病死者臨時招魂祭

尙ほ五月一日より同七日まで、九段靖國神社に戰病死者の臨時招魂祭、並びに例次大祭を執行せられ、二日午前八時勅使參向、次で陸海軍諸隊參拜し、吾が聯隊は軍旗を植立せる一大隊を編成し、聯隊長指揮の下に代表參拜を行ひ、翌三日には　天皇　皇后及び　皇太子殿下行幸啓あらせられ、其の祭儀の莊重盛觀は、實に前代未見の事であつた。

尙三十九年八月十三日、營庭に於て、野戰隊に屬せる者の勳章授與式を擧行す。受勳人員（准士官以下）は總數四千五百九十五名、其の內殊勳八十九名、殊勳の甲に列せられたる者三十六名の多きに達し、他隊に比し方に約二倍に當る。實に至大の榮譽と謂はなければならぬ。

●表一　准士官以下受勳者內譯

旭日六等 功七級	旭六等 功七級	旭七等 功六級	旭七等 功七級	旭八等 功六級	旭八等 功七級	瑞七等	瑞八等	賜金
一〇	二	五	二三	一七四	一二一	三	四四一	三、〇二七	一七八八	二〇八

●表二　一戰鬪間に於ける一銃の最大消耗彈數

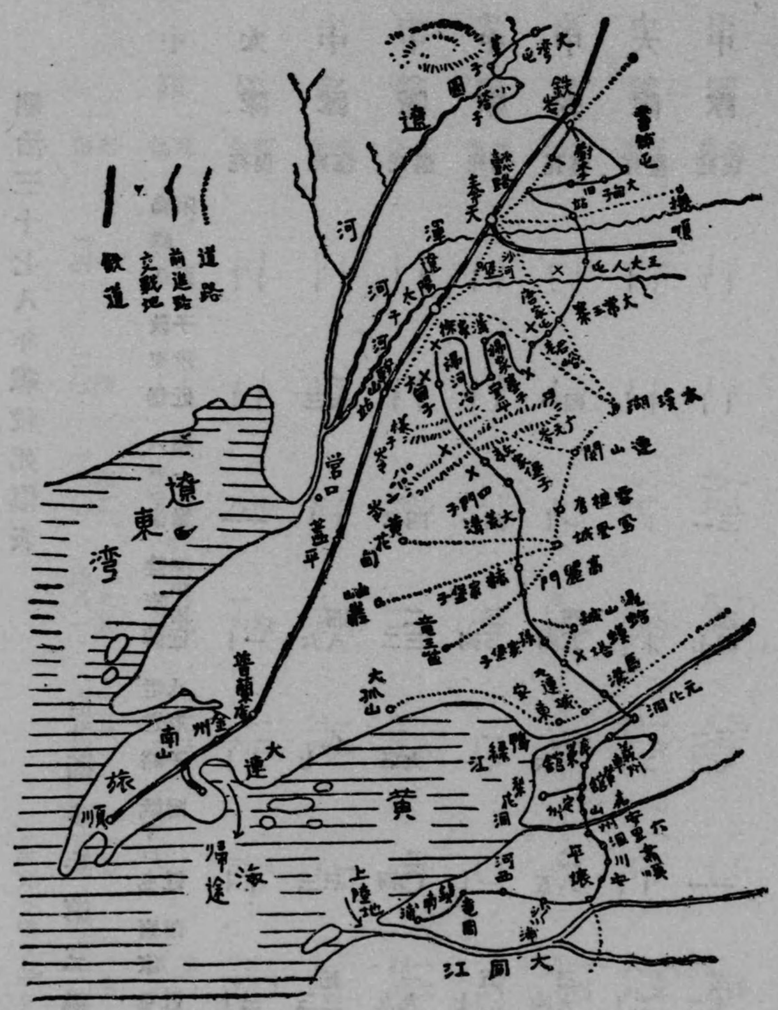
蛤蟆塘	四〇發	樣子嶺	二九〇發
徐家溝	七〇〇發	老君峪	六〇發
唐家屯	三四〇發		

●表三　戰時中に於ける聯隊長●大隊長の移動

聯隊長	小原芳次郎	自明治三十四年十一月廿一日 至同三十七年十月十三日	
	志波今朝一	自同三十七年十月廿三日 至同三十八年四月九日	
	柳下重勝	自同三十八年八月九日	

	佐々木平藏	自同三十六年七月十一日至同三十七年五月十一日	同三十九年二月十日
第一大隊長	三好兵介	自同三十七年五月廿二日至同三十七年八月廿六日	
	佐藤房隆	自同三十七年八月廿六日至同四十年十一月十四日	徐家溝にて戰死
	大多和新輔	自同三十七年三月十四日至同三十八年七月廿四日	
第二大隊長	鮫島兼尚	自同三十八年七月廿五日至同三十八年八月三日	
	久米德太郎	自同三十八年八月四日至同三十九年三月九日	
	松前正義	自同三十七年二月五日至同三十七年八月三十日	
第三大隊長	鵜飼素行	自同三十七年九月十四日至同三十七年十月三日	唐家屯にて負傷
	松前正義	自同三十七年十月四日至同三十八年三月三日	
	岩田恒	自同三十八年三月七日至同三十九年十二月四日	唐家屯にて再負傷

日露戰役前進經路要圖



明治三十七八年戰役死傷表

近衞步兵第三聯隊

		鴨緑江附近	数家堡子附近	バパン嶺 樣子嶺	徐家溝 遼陽附近	老君峪 八家子	姚千戸屯附近	唐家屯附近	計
第一大隊	死	｜	｜	一	｜	｜	｜	｜	一
	傷	｜	｜	一	一	｜	｜	三	五
第一中隊	死	｜	三	｜	六	七	三	三	二二
	傷	｜	一六	｜	四八	八一	三	五三	二〇一
第二中隊	死	｜	｜	二	二	三	四	九	二〇
	傷	｜	｜	一四	二三	九	二〇	一九	八五
第三中隊	死	｜	｜	一	四	一	｜	七	一二
	傷	｜	｜	四	三三	一七	一	五〇	一〇二
第四中隊	死	｜	一	｜	四	六	五	四	二〇
	傷	｜	四	一	四五	二一	二六	三九	一三六
第二大隊	死	｜	｜	｜	｜	｜	｜	｜	｜
	傷	｜	｜	｜	｜	二	｜	二	四
第五中隊	死	｜	｜	一	七	二三	一	二	三四
	傷	｜	｜	三	四四	三七	一	三七	一二二

		鴨緑江附近	数家堡子附近	バパン嶺 樣子嶺	徐家溝 遼陽附近	老君峪 八家子	姚千戸屯附近	唐家屯附近	計
第六中隊	死	｜	｜	一八	二〇	三五	｜	四	七七
	傷	｜	｜	二六	八九	八二	｜	二六	二二三
第七中隊	死	一	｜	・	一〇	一六	｜	一五	四三
	傷	七	｜	一四	七〇	四二	｜	六八	二〇一
第八中隊	死	｜	｜	｜	六	｜	｜	一四	二〇
	傷	一	｜	七	三四	七	一	五七	一〇七
第三大隊	死	｜	｜	｜	｜	｜	｜	｜	｜
	傷	｜	｜	一	二	｜	｜	二	四
第九中隊	死	｜	｜	二	五	八	｜	一六	三一
	傷	｜	｜	六	二一	三五	一	四六	一〇九
第十中隊	死	｜	｜	五	八	一六	一	一三	四三
	傷	｜	｜	二五	二二	三四	｜	五四	一三五
第十一中隊	死	｜	｜	四	四	一二	三	一〇	三三
	傷	六	｜	八	一六	二六	三	六六	一二五
第十二中隊	死	｜	｜	九	九	二三	｜	二〇	六一
	傷	｜	｜	二五	三三	三二	｜	八八	一七八
計	死	一	四	四二	八五	一五〇	一七	一一七	四一六
	傷	一四	二〇	一三〇	四八一	四三四	五七	六一〇	一七三八

（生死不明ヲ除ク）

第八章　芳名千載

一、感狀蒐錄

日露戰爭に於て當聯隊が滿洲軍總司令官及軍司令官より感狀を授與せられたる事は、前述の通りであるが、此の外將校士卒にして、拔群の功に依て第一軍司令官（大將男爵黑木爲楨）より特に感狀を授與せられたる者前後八名の多きに及んだ。其の勇敢にして兼て義烈なる行動は、永へに傳へて以て教育資料となすに足る。依て是を此に錄す。

一、歩兵少尉田中雄

遼陽會戰中八月三十日徐家溝西方高地の戰鬪に於て、激戰八時間の久きに亙り、中隊の損傷百餘に及び、中隊長以下幹部盡く死傷す。少尉乃ち代て中隊を指揮し、生存せる殘員を糾合して戰鬪を繼續し、堅忍克く陣地を固守したり。沙河の會戰中十月十二日老君峪北方の高地を夜襲するに當り、敵の抵抗頗る頑强にして、中隊の死傷忽ち百餘に及び、中隊長重傷を負ひ小隊長戰死し、戰勢頗る苦境に陷る。少尉乃ち代て中隊を指揮し奮進敵壘

に肉薄し、身傷くも屈せず、遂に敵陣に突入して之を占領せり。以上少尉の動作は艱難を排して克く其任務を達成したるものなり。仍て本職は此に感狀を授く。（明治三十七年十月十二日、第一軍司令官男爵黑木爲楨）

二、歩兵少尉金野武雄

明治三十八年二月廿八日姚千戸屯の敵を攻擊するに當り、少尉は突擊隊を指揮して前進中、頭部に負傷するも屈せず、率先彈雨を冒して、先頭第一敵の陣地に突入して同村を占領し、三月三日唐家屯北方高地の攻擊に際しては、創痍未だ癒えざるも、强て部下小隊に隨伴して、敵の前哨を驅逐して其第一陣地を攻擊するに當り、小隊長二木曹長重傷を負ひたるを以て、自ら小隊を指揮し、遂に敵を北方に擊退して其陣地を奪取したり、其動作堅忍勇敢、功亦大なり。仍て本職は此に感狀を授く。（三十八年三月三日、前同斷）

三、曹長藤崎助右衛門（第十二中隊）

三十七年六月廿五日師團の右側支隊北部鷄冠山より四門子に向て前進するに當り、曹長は斥候として前衛に先行し、終日敵狀を搜索し、常に有利の報告を致し、翌廿六日支隊の本隊と共に合せんが爲め前進するに方り、曹長は朝來の濃霧を衝て奮進、途々敵の約十騎を

驅逐して萬兩河西に進入す。此時胸部に擦過銃創を受けたるも、遂に本隊の前衛騎兵と連絡するを得たり。七月廿一日韓家堡子・邱家堡子・石城子附近の敵情を偵察する爲め夜暗に乘じ、降雨を冒して、先づ邱家堡子に入り、次で石城子に向ふや途に敵兵六騎に遭ふも、巧みに之を避け、其後續部隊の有無を偵知せんと欲す。路傍の畑中に潛伏する多時、遂に歩兵一小隊前進するを視るや、之に尾して深入し、邱家堡子東南高地に於て敵の下士哨より射撃を受けたるも、之を避けて韓家堡子に入り、廣く敵狀を搜索し、翌日午前十一時歸還報告せり。七月卅一日樣子嶺攻撃の際は、中隊長の許に在て敵情視察・彈著の觀測及命令の傳達に從事し傳令二名は負傷し、中隊長も亦重傷を負ふや、曹長身を以て之を救護し後方に運搬せしめたり。以上曹長の所爲に困厄に耐へ危難を冒し、勇敢にして又堅忍克く任務を盡したるものなり。仍て本職は此に感狀を與ふ。（三十七年七月三十一日、前同斷）

四、後備上等兵古澤直吉（第二中隊）

卅七年七月二十二日上等兵は利浦嶺に於ける前哨服務中、隣接中隊と連絡を保持すべき命を受け、其任務を終り將に歸途に就かんとするや、我中隊の前面に當り激烈なる銃撃を聞き、急走之に赴き、激戰中なる我獨立下士哨の線に加入し、會〻敵彈の爲に其腹部を貫かるゝも、戰友の志氣を沮喪するを恐れて其傷を秘し、自若として射撃を續行し、敵兵潰亂の狀を見て萬歳を唱へ、其彈藥を降兵に頒たんとするに際し、遂に斃る。其動作頗る勇敢なり。仍て本職は其忠勇を表彰す。（三十七年八月三日、前同斷）

五、豫備上等兵稻葉直市（第六中隊）

卅七年八月三十日徐家溝附近の戰鬪に於て、上等兵は三時間に亙る激戰中、終始危險を冒して傳令の任務を盡し、殊に午後の頃敵兵新たに加はり、中隊長の號令左翼小隊に徹せざるに方り、進んで之を傳達せんとし、行く事十五六歩にして忽ち頭部に貫通銃創を受け、喪心昏倒し、直に蹶起すれとも流血淋漓苦悶歩行に堪へず、遂に匍匐して命令を傳へ、復た人事を省せず、然れども口頭常に命令を唱へて止まざるが如きは、死に瀕して猶ほ使命を重ずるものなり。仍て本職は此に感狀を與ふ。（三十七年八月三十日、前同斷）

六、上等兵野村磯吉（第六中隊）

卅七年六月廿六日敵家堡子附近の戰鬪後、河野少尉に從ひ敵情偵察に任じ、敵の警戒線内に進入し、其報告を致さんが爲め敵の警戒線を脱出するや、偶〻敵の斥候に遭遇したるを以て、直に之を撃退し、夜半前衛本隊に復命報告せり。七月卅一日樣子嶺攻撃に際し、石

城子西北高地に於て敵と對戰中戰鬪斥候となり、敵の射擊下に在て泰然監視中、敵の一彈其右脚を貫通するも屈せず其任務を續行中、第二彈胸部を貫通し遂に戰死す。依て本職は此に其忠勇を表彰す。（三十七年七月三十一日、前同斷）

七、上等兵大橋啓吉（第七中隊）

卅七年五月一日中隊の腰溝北方高地に向て前進するや、上等兵は鬚河徒渉點の偵察を命せられ、挺身衆に先ちて裸體となり、危險を冒して能く其任務を完うし、中隊を誘導して渡過し、尙ほ後續部隊の渡過を容易ならしめたり。次で被服を纏ふに暇なく、敵の陣地に先登し、馬溝西南の山頸に到るや、退却せる敵兵踵を返して銃を擬す。上等兵叱咤急進其銃を奪ひ、遂に之を撲殺し、尙若干敵卒を捕獲せり。爾後續いて敵を蛤蟆塘附近に追擊し、列兵の死傷多きに際し耐忍剛氣能く衆の標準となれり。依て此に感狀を與ふ。（三十七年五月一日、前同斷）

八、一等卒鈴木兼五郎（第十中隊）

卅八年三月三日未明、唐家屯北方高地に於ける敵の第一陣地を奪取するに方り、鈴木一等卒は中隊に率先して突入し、續いて敵の本陣地に突入せんとするや、中隊は副防禦の爲め沮止せられ死傷頗る多し。一等卒乃ち奮進鐵條網を破壞して一條の進路を開き、自ら先頭

に立て攻擊部隊を誘導す。會〻大隊長の敵彈の爲に負傷するや、直に馳せて之を救護して後方谷地に送り、再び戰鬪を繼續せり。其動作勇敢其功亦大なり。依て本職は此に感狀を與ふ。（三十八年三月三日、前同斷）

二、戰場美談

感狀を受くるに至らざりしと雖も、之に比較して優るとも劣らぬ美談は、猶ほ指を屈するに暇なく、茲に蒐錄する四五の逸話の如きは、何れも吾が聯隊史上に不朽の花を添ふるものである。

い、斃れて後已まず

卅七年六月廿九日利浦嶺の攻擊に方り、第一中隊は利浦嶺の東側谷地を前進中前面高地に在る敵兵より不意に猛射を受け、中隊は直に山腹を攀登して高地を占領せんとしたるも、前日來の降雨未だ止まず濃霧益〻加はり、殆ど咫尺を辨せぬ有樣にて前進頗る困難に陷つた。依て斥候を高地森林に派遣せんとするや、伍長峰村富作は作んで任に當らん事を請ひ、危險を冒して能く敵狀を搜索し、將に歸途に就かんとする時、身に二彈を受けた。剛勇不

撓の伍長は疼痛に屈せず、匍匐して中隊陣地に達せし時、三度胸部を貫かれて全く身の自由を失うた。

『中隊長殿、中隊長殿』

唸くが如く叫ぶが如き聲を聽つけて、中隊長其の場に至りたるに、伍長は苦悶の中に敵の所在を報告し、終つて息絶えた。

又二月廿五日(三十八年)姚千戸屯に向つて夜襲を決行するに方り、第三中隊曹長小松國三郎は斥候より歸來し、隊長の面前に至りて報告を始めたる時、一彈飛來して其の顏面を貫いたので、瞳とばかり地上に打斃れ、頗る重傷であつたが、假繃帶終るや直に體を起して報告を續けた。口舌自由ならず言語は早や不明なるも、更に怯める態なく遂に報告の任を完うしたる後、莞爾として繃帶所に運び去られたといふ。

ろ、彈雨を冒して上官の危急を救ふ

遼陽戰の第一日、第三中隊は大隊の前衛として先づ貨郎溝を占領し、次で今田中尉は偵察の任務を受けて二道河の西南高地附近を偵察中、突然頭上より敵の猛射を受けて傷き倒る。一等卒千田金次郎は直に馳せて傷ける中尉を肩に引かけ、同高地の麓を流るゝ河流を亂し

て其の半に達したる時、再び猛烈なる狙撃に會ひ負はれた中尉も負へる千田も各〻一彈を受けて水中に溺れた。之を望み見た一等卒中村常左衛門は、奮然彈雨を冒して河中に躍入り、遂に中尉と千田一等卒とを救ひ出した。不幸にして今田中尉は復び起つ事を得なかつたが、身を以て上官の危急を救うた二人の功は、永く沒すべからざるものである。

は、豪膽なる歩哨

第四中隊一等卒關谷丑吉は四月廿七日(三十七年)韓國元化洞の北方鴨江廟に在りて監視哨勤務中、鴨江廟は目標著明なる爲め敵の砲彈集注し、壞て其の一彈は廟の屋蓋を貫き塵煙濛として四邊を蔽ふた。此より數十歩を隔てゝ之を目擊せる下士哨は、甚く歩哨の身の上を危ぶんで居たが、哨煙程なく消え去つた跡に毅然として舊守地に直立せる關谷歩哨の姿を見て、皆な其の豪膽に喫驚した。仍て下士哨長は再び砲彈の飛來せむ事を慮り、歩哨の位置を變へよと注意した。然るに關谷は頭を横に振つて、

『私は小哨長殿の命に依て此地に立て居るのであります、小哨長殿の命あるでなければ、此の地を去る事はできません』

下士哨長は百方之を說くと雖も、關谷は頑として聽せず。後小哨長來つて始めて其位置を

變更した。長官の命維れ重し、銃砲彈の如きは彼の眼中に無かつたのである。

に、小行李の奮鬪

八月二十三日(三十七年)近衛師團は樣子嶺の陣營を發し、倏忽として敵の眉目に迫り、急追して之を遼陽に壓迫するや、戰鬪連日に亙り山を超え溪を渡り風に梳り雨に浴し、殊に三十日徐家溝の戰鬪は當聯隊の遭遇したる最大激戰で、一兵の發射彈數は七百發に及んだ。當聯隊が日露戰爭中に費したる一銃の最大彈數は一千四百七十發であるから、實に其の半は此の一戰に於て費消せられたものである。從つて前線より後方に彈藥補充の令は櫛の齒を引くが如くに傳へられた。然るに敵彈は我が彈藥の補充路を掃射し、狗のはしるを見ても十數門の砲熕を一時に轟發し、飛彈は驟雨の如く注がる。師團參謀長重見大佐(重雄)路傍より之を望見し、其の危險を警めて、

『おい、危いぞ、暫らく避けて、後に進め』

と注意した。輸卒石井彦二郎・今井善太郎・澁谷由太郎・神多野佐太郎等異口同音に、

『我が隊が危急存亡の秋です、戰場で彈の飛ぶのは當然の事であります』

と齊しく突進す。斷じて行へば鬼神も亦避くとか。敵彈雨の如しと雖も空しく地を擊つの

み、四人は無事に戰線に達した。輸卒榎本寛太郎・鈴木半之助・都築仙之助・新井巳喜藏の四名も亦飛彈の間を、彈藥を肩にして火線に進むこと數回、恰も平地を往來するが如き狀に見えた。此戰鬪後重見大佐彼等の勇敢を賞して措かず、『此等の輸卒は僅に數ケ月の教育を施したる者に過ぎない、而も此の如きものがある、教育に因て然るか、將た勇敢は國民的天性に出づるか、我が軍の連戰連勝は當然である』と。

ほ、壯烈なる補充兵の意氣

第九中隊の上等兵下村正政は補充兵として入隊し、常に傳令又は電話手として稱揚せられて居たが、奉天の總攻擊戰に際し又も電話手を命ぜられた。蓋し最も熟練せるが故である。然るに下村は之を悲しみ是非に戰線に加へられむ事を嘆願した。

小隊長慰めて曰く、

『忠義に二つはない、殊に電話は軍隊の氣脈を通ずるもので、今日の戰鬪には必要缺く可からざる機關である。其の功も亦戰線に在るに比して毫も劣るものでない。』

然し下村は頭を振つて曰ふ、

『けれども、平常補充々々と輕蔑せられるのが殘念に堪へません。小隊長殿、何卒枉げて

御許し下さい』

哀願して止まぬので、小隊長は此旨を中隊長に上申したるに、中隊長乃ち其の勇を激賞して特に戰線に加へた。中隊は唐家屯の堡壘に向つて激戰數時間に亙り、死屍山を築き流血河をなし、刻一刻と悲慘の光景を現出し來つた。下村は松前大隊長と共に奮進し、敵前四十五米突に在る鐵條網を破壞せんとする刹那、敵彈二回飛び來つて其の左手を貫通した。勇敢なる下村は屈する色なく、尙も右の雙手を以て破壞を續けたるに、砲彈は更に右手を切斷した。剛氣双びなき勇士も此に至つて如何とも爲難く、辛うじて銃を傷ける左手に取り、滑つて谷の中に下りた。見る者嘆賞せざるはなく、爾後同中隊には補充々々と云ふ聲が絶ゆるに至つたといふ。

上官を慕ふ衷情

第十二中隊一等卒中川吉太郎は八月廿三日(三十七年)の午後補充として野戰隊に到着した時は恰も其隊は攻擊前進中で、直に隊伍に列し戰鬪に參加した。廿五日大隊はキミンズイ北方高地の敵を擊退して追擊に移つた時、中川は靴傷の爲め頗る歩行に艱みつゝあつたが、着隊後三日も經たざるに身體故障の爲め戰烈を罹るゝが如きは軍人の恥辱なりとて、强て中

隊長に請て遂に從ひ、衆と共に追擊毫も苦痛の色を表に現はさなかつたが、軈て敵の一齊射擊に會ひ胸部を貫通せられて、一度は其の場に倒れたが猛然蹶起して、

『天皇陛下萬歲！　第十二中隊萬歲』

を唱へ、再び倒れた。看護卒は直に馳せて收容せんとしたるに、中川は呼吸切迫しつゝ微かに唇を開いて、

『僕は補充後未だ三日目で、中隊長殿●小隊長殿●分隊長殿の官姓名をも忘れてしまつたのだ。一寸敎へて呉れ玉へ』

と言た。依て看護卒之を敎ふれば、蒼白なる面に微笑を含んで復誦したる後瞑目した。君國を思ふの赤誠、上官を慕ふの衷情は瀕死の言行に顯はれて床しき限りである。

酒と煙草を廢して恤兵部へ

第十二中隊上等兵服部覺禪は素と法衣を纏へる身である。卅七年十月補充として出征以來酒と煙草を廢し、冗費を省き、得る處の給料は貯蓄して陸軍恤兵部に献納して居たが、自ら語らざるが故に知る者とては無かつた。方に唐家屯北方高地を夜襲せんとするに當り、服部は若干の貯金を曹長に示し、

『今夜こそ私共の最後でせう。是は僅少ですが、後日恤兵部へ献納の手續を、お頼み致します』

と。中隊長以下始めて玆に服部の美德を知り、深く之を嘆賞したるに、服部は却て辯疏して曰く、

『私は法門に在る者で、鄕里に願慮すべき者とては無き身です。若し此の如き微行も、德の一端たるを得ば、是れ偏に師の賜で、私は唯だ、其の敎に從つたのに過ぎません』

とて毫も誇る色が無かつた。

第九章　平時歴史

一、明治二十七年の大震災

明治二十七年六月、日清戰爭中當聯隊には一の悲しむ可き出來事が起つた。其れは六月十二日の大地震である。時恰も聯隊は動員を行はれたまゝ待命中であつたが、轟然たる大音響と共に屋上の大煙突が倒壞して、一年志願兵男爵押小路師行並に卒一名壓死し、歩兵中尉神代種樹及卒十名は重輕傷を負ひ、神代中尉及卒一名は翌廿一日遂に死亡するに至つた。皇上深く憐憫あらせられ、特に祭粢料を賜ふ。而して兵舍は破損頗る大なりしと、再震の虞ありし爲め、各大隊は一時習志野の廠舍に避難したが、習志野附近は久しき旱魃に井水涸れ、甚だしく飲料水の缺乏に苦しんだので、八月十九日取敢ず霞ヶ關の舊營舍に收容した。これが出征を前に控えての騷ぎであるから、其の混雜は思ひやられる。

二、大正の大震災

大正十二年九月一日午前十一時五十八分、突如として、關東地方に未曾有の大地震起り、其の禍殃の峻烈なりし事は、讀者の未だ記憶に新たであらう。同日我聯隊にては新任旅團長野田久吉少將の初度巡視中にて、聯隊長初め扈從の將校と共に第五號倉庫に到る、時に恰も一震に遇ひ、直ちに營庭に避難せしが、續いて二震、三震に、さしも大建築なる我兵舍も大洋上の小舟の如くに異樣の音をきしり立てゝ、左右上下に動搖し歩行もならず、今にも崩壞するが如くであつた。聯隊長は非常號音を吹奏せしめ、又大尉田中正直に兵卒を引卒せしめて宮城正門、大尉峯順四郎以下三十五名に赤坂離宮、少尉岩山陽次郎に兵卒を引卒せしめて賓所、中尉世良田勇以下五十九名に青山御所等各增援儀仗衞兵に急行せしめ、尙閑院宮邸へ少尉吉田重藏以下二十名、東伏見宮邸へ中尉大野武城以下七十七名、王世子邸へ少尉中島正清以下二十五名、東久邇宮邸へ曹長中島和美以下三十五名、東京第一衞戍病院へ中尉大山菊平以下四十名、陸軍省へ中尉中村四郎以下二十二名、兵器本廠、航空局航空部へ軍曹關芝之助以下三十名を急行して警備せしめた。

斯くて聯隊の附近の新町三丁目方面に失したる火は火勢猛烈となりて、屯營の東南角を襲ひ、一段低い地域にある機關銃隊の厩は已に焦熱を感じ、一度此處に延燒せば地勢上と、風上の爲めに聯隊兵舍に延燒する爲め、大尉中村唯一以下九十六名は身の危際をも顧みず破壞した。然るに山王下方面から田町を燒いて來た火は、折柄の烈風に火勢愈〻猛烈になり、再び一ノ木町を襲ふたので、大島特務曹長は五名の兵卒と共に決然家屋の破壞に力め、爲めに丹後町方面への延燒は免れたのである、この間新町方面にては三等軍醫田村一夫以下四名の衞生部員と機關銃隊上等兵大野欽治以下十四名と共に倒壞家屋の下敷となれる男女十六名を救助した。地震と同時に水道は斷水したる折柄警視廳消防手は離散し、市內數ケ所の失火は無人の域を橫行するが如く益〻擴大し、加ふるに强風吹き卷き起り宮城內に又盛んに飛火して、北御車寄、主馬寮及振天府の屋上に燃え上りたるも、大尉藤岡武雄以下三十一名にて鎭火せしめた。此夜米國、獨逸兩大使館、白國公使館、司法、農商務、海軍遞信の四省、首相官邸へ半小隊の員數を派遣して警備し、又一方營門前に平釜十四個を並べて炊爨して收容したる罹災者に分配した。

翌二日餘震尙ほやまず、通信機關皆杜絶したる爲に盛んに流言蜚語行はれ、殊に夜に入り

て、不逞鮮人暴行の報は瀕々と至る爲め、營内に避難せんと群衆暗中に殺到し悽愴を極む、仍て直ちに浴場、鍛工場、銃工場、靴工場、劍術道場、面會所を開放し收容した。

午後六時四十分、戒嚴令司令官に陸軍大將福田雅太郎任命せられ、戒嚴令は震災地に布告せられ、東京を二分して東北方を近衛師團、西南方を地方上京部隊にて警戒する事となり、即ち聯隊本部は四日午後一時軍旗を先登に小石川區茗荷谷町德川公爵邸に移り、砲兵工廠、兵器支廠、高等師範、護國寺、巣鴨岩崎邸の線を第二大隊にて、雜司ヶ谷の一部、早稲田、牛込矢來の線を第一大隊にて、大塚驛、巣鴨町、學習院の線を我聯隊の管下に入りて騎兵第十四聯隊にて警戒した、斯くて人心も平穩に歸した爲め、警備縮少を行ひ、九月十七日機關銃隊は第三大隊と交代して歸營し、十八日第二大隊は第六、七中隊と交代して歸營し第五中隊は第十中隊と交代して歸營した。

同日午後一時四十分桑田侍從武官聯隊本部に臨まれ、左の御沙汰があつた。

御沙汰

天皇陛下ニ於カセラレテハ大震災以來戒嚴ニ服務スル旅團長以下ヲ苦勞ニ思召サレ親シク其實情ヲ實視スヘキ旨本職ニ御沙汰アリ

尙桑田侍從武官より衞戍病院の消火に從事せる吉澤少佐に對し慰勞し、天聽に達すべき旨傳へられた。

九月二十日、主力を兵營に集結し、第三大隊本部を德川公爵邸に移し、第九中隊を小石川區、第十中隊（第十一中隊一小隊）を巣鴨町西巣鴨町高田町の一部、大塚ガード、巣鴨ガードの兩檢問所、巣鴨刑務所、池袋停車場、第十一中隊（一小）飯田橋檢問所の警備をなさしめた。

九月二十日、福田戒嚴司令官は陸軍大將山梨半造と交代した。

九月二十八日、第二大隊は第三大隊と交代して同時に歩兵第六十六聯隊の警備區域を代警し、尙十月五日に至りて歩兵第二十聯隊の警備第五區をも併備した。

十月十五日、各宮邸、大公使館に巡遣中の部隊も近歩四と交代し歸營した。

斯くて十一月十五日全部引上げ初め、各中隊共聯隊に集結したのであつた。顧みれば發震以來七十六日間克く炎暑の下にありて劇務に堪え地方人の信望に副ひ、且又一人の死病なき事は平素の訓練よろしき事が之れを證するものである。

十一月三十日山梨戒嚴司令官より左の賞狀附與せられた。

賞狀

近衛歩兵第三聯隊

其隊ハ震災後命ヲ承ケ東京東北部警備ニ膺リ禁闕警衛ノ大任ヲ完ウシ克ク危險ヲ冒シテ混沌タル巷衢ノ内ニ駐在シ人命ノ救濟竝應急救恤ニ任ジ又皇族邸及諸官衙ノ警護ニ懋メ寡弱ナル兵員ヲ以テ不屈不撓人心ノ安定秩序ノ維持ニ努力シ多大ノ艱難ヲ排シ日夜精勵終始渝ルコトナク其重任ヲ全ウシ以テ克ク公衆ノ信倚ヲ擔ヒタリ今ヤ戒嚴解止ニ方リ衷心其ノ勞ヲ多トシ其功績ヲ確認ス

十一月十六日

關東戒嚴司令官　山梨半造

三、特命檢閲

特命檢閲の制度は明治三十六年始めて設けられ、以來時々施行せられ、我聯隊にては特命檢閲使來營したのは左の如くである。

一、明治三十六年　特命檢閲使元帥陸軍大將侯爵山縣有朋、檢閲事項左の如し。

五月九日　閲兵、營内巡視、下士以下の學科。

同日午後　營行社に於て聯隊長統率の兵棋、動員計畫及内務。

二、明治三十九年　特命檢閲使陸軍大將川村景明、檢閲事項左の如し。

九月廿六日　聯隊長報告、兵器　被服、器具材料の狀態、動員計畫概要、戰後内務に關し特に規定したる事項、戰後將卒の一般狀態、閲兵、兵舍及倉庫巡視。

九月廿七日　大尉以上戰術。

十月十六日　連合野外演習（習志野原）

三、明治四十五年　特命檢閲使陸軍大將伏見宮貞愛親王殿下、檢閲事項左の如し。

五月廿二日　書類檢査。

五月廿四日　代々木練兵場にて各個教練、機關銃教練、準士官以下の試問、手榴彈の用法、將校距離目測、將

校現地講話。

五月廿五日　營内巡視、銃劍術、軍刀術、器械體操、將校馬術、團上戰術。

特命檢閲終了後、檢閲使殿下より一般良好なる旨の御講評を賜つた。

四、大正五年　特命檢閲使陸軍大將長谷川好道、檢閲事項左の如し。

五月十八日　閲兵、將校集會所にて教育内務、動員、兵器、經理、衛生、馬に關する書類檢査、將校准士官の軍刀術、士官候補生、一年志願兵の銃劍術、營内巡視、兵器分解檢査。

五月十九日　代々木練兵場にて各個教練、現地戰術、聯隊本部下士の距離測量、通信、乘馬、手榴彈用法、兵棋。

五、大正十二年　特命檢閲使陸軍大將田中義一、檢閲事項左の如し。

六月九日　書類檢査、營内巡視、特務曹長の軍刀術、曹長、軍曹、伍長、下士候補者、士官候補生の銃劍術、初年兵の體操、兵棋、經理に關する試問、經理書類査閲、救急法、衛生法、戰用駄馬材料及蹄鐵術修業者の教育。

六月十日　代々木練兵場にて一年志願兵教育、下士候補者教育、准士官下士教育、通信、動員、現地戰術、擔架術、馬に關する教育。

六、昭和五年　特命檢閲使陸軍大將白川義則、檢閲事項左の如し。

六月十二日　閲兵、書類査閲、營内巡視、准士官下士官教育、（以上營内）小隊教練、平時歩兵砲分隊教練、幹部候補生教育（以上代々木）

六月十六—十七日　千葉縣習志野原に於て近衛師團聯合戰鬪教練。

四、特別大演習參加

一、明治二十三年陸海軍聯合大演習　同年三月三十日より四日間、伊勢濱地方に於て　明治天皇御統監の下に、陸海軍聯軍大演習を擧行せられ、聯隊は西軍に屬して之に參加した。

東軍　司令官　陸軍中將　黑川通軌（第三師團、近衛歩兵第一旅團　軍艦高雄以下七隻）

西軍　同　同　高島鞆之助（第四師團、近衛歩兵第二旅團　高千穗以下六隻）

二、明治二十五年　十月二十三日より三日間、宇都宮地方に於て擧行せらる。

南軍　司令官　陸軍中將　山地元治（第一師團長、山地元治　近衛歩兵第一旅團長、黑木爲楨）

北軍　同　同　佐久間左馬太（第二師團長、佐久間左馬太　近衛歩兵第二旅團長、大沼逵）

三、明治四十年　十一月十六日より三日間、栃木縣眞岡附近に於て擧行せらる。

東軍　司令官　陸軍大將　川村景明（第一師團長、載仁親王　第三師團長、大久保春野　砲兵第二旅團、騎兵第二旅團）

西軍　同　同　貞愛親王（近衛師團長、大島久直）（第十五師團（長、中村覺）砲兵第一旅團、騎兵第一旅團）

四、大正元年　十一月十四日より五日間、埼玉縣下川越地方に於て擧行せらる、是れ大正天皇御登極第一年の特別大演習であつた。

南軍　司令官　陸軍大將　大島義昌（近衛師團（長、戴仁親王）第一師團（長、一戸兵衛）

北軍　同　同　大島久直（第十三師團（長、長岡外史）第十四師團（長、山田忠三郎）

五、大正七年　十一月十四日より四日間、栃木、茨城、兩縣下に於て擧行せらる、今回は歐洲大戰に鑑み、大規模の計畫を以て行はれ、從つて參加部隊も多く、其作戰の雄大なる近時稀に見る大演習であつた。

東軍　司令官　陸軍大將　松川敏胤（近衛師團（長、邦彥王）第二師團（長、河內禮藏）第八師團（長、白井二郎）第十四師團（長、栗田直八郎）

西軍　同　同　仁田原重行（第一師團（長、河合操）第十三師團（長、西川虎次郎）第十五師團（長、尾野實信）

六、大正十年度　十一月十七日より四日間、西部東京、神奈川縣下に於て施行、本演習は西軍は東京を突かんとし、東軍は又是れを追はんとする擬戰にて海軍亦參加し兩軍六十餘臺の飛行機は日夜隨所に爆彈を投下し頗る大規模なりき。特に新令によりて皇太子殿下御統監被遊、演習後駒澤園藝學校々庭にて殿下の御講評あり、後新宿御苑にて茶菓の御下賜、兵卒には酒肴料の御下賜ありたり。

東軍　司令官　陸軍大將　大井成元（近衛師團（長、藤井幸雄）第一師團（長、西川虎次郎）

西軍　司令官　陸軍中將　梨本宮守正王（第三師團（長、武藤信義）第十三師團（長、河村正彥）第十四師團（長、朝久野勘十郎）

皇太子殿下令旨

裕仁勅を奉じて今期特別大演習を統監し將校以下の精勵に依り略〻所期の目的を達し特に陸海軍協同作戰の演練は實施の稀なるに關らず其成績の概ね可なるを認め茲に之を欣喜す演習の概況は日々奏電せしも其詳細は更らに復奏する所あらんとす惟ふに軍事の趨勢は世界の大戰を劃して軍の編制裝備並に運用に就き其の改進の著しきものあり將校以下益〻奮勵研鑽以て我國粹の精華を發揚し聖旨に副ひ奉らんことを望む。

七、昭和四年十一月十四日より四日間、茨城縣下に於て擧行せらる。

是れ今上陸下御登極第一年の特別大演習であつた。

大演習終了後太田町小學校に於て御講評あり後、水戸市に於て觀兵式を擧行せられ、將校は御賜饌を賜り下士以下は御紋菓の御下賜ありたり。

南軍　司令官　陸軍大將　白川義則
　　（近衛師團長、林銑十郎
　　第一師團長、眞崎甚三郎
　　混成第百二旅團長、清水喜重
　　第十四師團長、松木直亮）

北軍　司令官　陸軍大將　井上幾太郎
　　（近衛師團長、鳩彦王殿下
　　第十四師團長、畑俊六
　　第一師團長、柳川平助
　　第二師團長、秦眞次
　　混成第一旅團長、中村孝
　　騎兵集團長、原常成）

昭和九年十一月十三日より三日間群馬、栃木縣下に於て擧行せらる。

西軍　司令官　陸軍大將　荒木貞夫

東軍　司令官　陸軍大將　阿部信行

大演習終了後高崎市に於て大觀兵式を擧行せらる。

本演習間十一月十日栃木縣佐野町西方地區に於て親しく戰線の御巡視あり、聯隊第一線に錦旗を拜し「近衛歩兵第三聯隊の將兵一同元氣か」との御下問を拜し、將兵益々感奮興起して軍旗の名譽を發揮した。

次で十二日再び御巡視の光榮に浴し志氣は彌が上にも向上したのである。

五、名譽射撃

吾が聯隊は近衛師團中に在りても、軍規の嚴肅●士氣の旺盛を以て知られ、諸般の成績優秀なる事は、一般に認めらるゝ處であるが、小銃射撃の如きは、其の最も得意なる技術の一と稱す可く、師團の競爭射撃に於て殆ど其の名譽旗を獨占せる姿であつた。

●●●●●第一次名譽射撃●

明治三十六年九月三十日及十月一日の二日に亙つて、大久保射場に於て、始めて近衛師團の名譽射撃が擧行せられた。蓋し第一より第四に至る歩兵聯隊各中隊より若干の射手を選拔して、競爭射撃を行はしめ、其の技術を比較すると共に練達琢磨の資に供したのである。結果は吾が第六中隊（隊長久米大尉）は師團中の最上位を占め、第九中隊は第二位を、第四中隊は第三位を、數次之を獨占して拔群の成績を示し、他隊をして眞に一驚を喫せしめた。十月二日青山練兵場に於て名譽旗授與式を行はれ、第六中隊は師團の中央前に整列し、軍樂隊奏樂中に師團長より親しく名譽旗を授與せられ、尙ほ同中隊に對して特に

天皇陛下より　雙眼鏡　一個

皇太子殿下より　銀　盃　一個

を下賜せられ、師團長より中隊長に指揮刀一振を賞與せらるゝなど、無上の面目を施すに至つた。

尙聯隊長（大佐）は即日御禮の爲め參內したるに、侍從武官長は左の如く謹話せられた。

『侍從武官長は名譽射擊に臨場して其の實況を視察したる後、第三聯隊は師團中に於て特別優等なる情況並に此聯隊は曾て守衛勤務中陛下に對し奉り缺禮せし兵ありしも、特別の恩赦を辱うし、感激に堪えず、頗る勉勵の結果今日の名譽を得たりと奏上したるに、

陛下には頗る御滿足の御樣子であつた』

聯隊長は退出後、謹んで此の趣を將校一同に傳へ、一同天恩の優渥なるを名譽の至大なるに感激し、益〻奮勵奉公を期したのである。

第二次名譽射擊

卅七年卅八年は戰役中なりしを以て、師團名譽射擊も一時中止の姿であつたが、戰後三十九年十月八●九兩日に亘りて、其の第二回が施行せられた。前回に吾が聯隊が著しき優秀を

以て全勝を占めたると、戰後第一次の競技なりし爲めに、世人の注目も亦頗る大なるものがあつた。初日吾聯隊の成績は依然として頗る優勢を示したりと雖も、遂に他隊の一中隊を拔くこと能はずして終つた、然れども吾が將卒は深く自ら恃む處あり、勇氣百倍して第二日の競技に望んだ、多年練磨の功は空しからず、吾が第八中隊（隊長川崎大尉）首位を占め、第六中隊より第三位以下數次悉く之を占め、名譽旗は再び吾が聯隊の手に歸し、天皇陛下及皇太子殿下より前年同樣の御下賜品があつた。

第三次名譽射擊

第三回は四十一年十月廿二日に行はれ、吾が第十中隊（隊長香川大尉）又も首位を占め、名譽旗は引續き吾が聯隊の手に歸し、天皇陛下及皇太子殿下の御下賜も亦同樣であつた。

第四次名譽射擊

四十二年十月二十二日、大久保三百米突射場に於て施行、吾が第十一中隊首位を占め、廿五日青山練兵場にて名譽旗授與式を擧行せられ、天皇陛下及皇太子殿下の御下賜亦前同樣にして、引續き四回まで、名譽旗を吾が一手に收めて、他隊をして健美已まざらしめたるもの、是れ畢竟吾が聯隊平日の奮勵此に酬いられたるに外ならぬのである。

六、聯隊特別射撃

然して聯隊間の射撃競技は、大正元年度限り各にて廢止せられて爾後は毎年、聯隊内の各中隊に就きて競技する事となつた。但し機關銃隊、歩兵砲隊は其特性に鑑み自隊内に於て實施することになつた。

年次	優勝中隊	中隊長
大正二年	第一中隊	東久邇宮殿下
同三年	第四中隊	皆川大尉
同四年	第四中隊	皆川大尉
同五年	第十二中隊	笹井大尉
同六年	第四中隊	森村大尉
同七年	第四中隊	森村大尉
同八年	第五中隊	竹下大尉
同九年	第十二中隊	竹中大尉
同十年	第四中隊	藤岡大尉

同十一年	第三中隊	三井大尉
同十二年	第三中隊	三井大尉
同十三年	第二中隊	宮田大尉
同十四年	第五中隊	小越大尉
同十五年	第九中隊	永澤大尉
昭和二年	第五中隊	河上大尉
同三年	第五中隊	小越大尉
同四年	第一中隊	稲見大尉
同五年	第一中隊	稲見大尉
同六年	第十中隊	松山大尉
同七年	第九中隊	中島大尉
同八年	第十中隊	松山大尉
同九年	第五中隊	蓮岡大尉
同十年	第六中隊	南大尉
同十一年	第六中隊	南大尉

昭和十二年（第一回）第六中隊　南大尉
同　（第二回）第七中隊　戸田大尉
同十三年　第五中隊　丸山大尉

七、近衛師團狙擊競技會

歩兵操典の改正と特に支那事變の教訓とに鑑み、射擊術特に狙擊技能の向上の急務を告げられたので、昭和十三年より師團に於て歩兵聯隊の小銃狙擊競技會計畫されるに至つた。其第一回は四月二十七日習志野原に於て行はれた。而して第二回は第十一中隊（長松下大尉）が優勝した。

八、聯隊劍術競技會

白兵は我國獨特の武技と云ひ得る程であつて、其威力は他の追隨を許さず、過去戰役に於て盡く敵膽を寒からしめたのである。當聯隊の銃劍術は技倆優秀であつて、歸鄕兵の大部は鄕軍に於て常に異價を發揮してゐるのである。之が奬勵並技能向上の目的を以て、各中

隊に就き毎年競技が行はれて居るのである。

年次	優勝中隊	中隊長
大正十五年	第九中隊	永澤大尉
昭和二年	第九中隊	永澤大尉
同四年	第十中隊	坂間大尉
同五年（第一回）	第十一中隊	白濱大尉
同（第二回）	第十中隊	松山大尉
昭和六年	第七中隊	上原大尉
同七年（第一回）	第六中隊	稅所大尉
同八年（第二回）	第十中隊	松山大尉
同九年	第一中隊	小松大尉
同十年	第十中隊	松山大尉
同十一年（第一回）	第二中隊	兒島大尉
同十二年（第二回）	第二中隊	土屋大尉
同十三年	第二中隊	土星大尉

九、近衛師團將校武術競技會

大正十二年近衛師團管下の將校の身心を鍛錬し、武技の向上進歩を圖る目的にて、毎年歩兵聯隊、特科隊の二樣に分けて、軍刀術、馬術、射撃等の競技を行ひ、成績優秀聯隊に於て、攝政宮殿下の御下賜優勝カップを爭奪して、其名譽を表彰する事となり、第一回に於て我聯隊は將校一同の武技は他の聯隊を抜き、大正十二年五月八日優勝カップ及び師團長より賞狀を受けた。大正十三年の第二回は惜くも近歩二に奪取せられたるも、大正十四年第三回施行の際は此の雪辱の氣概大ひに上り、將校一同勉勵の結果、二月十三日の軍刀術、二月十六日の馬術、三月十三日の射撃に於て成績優秀を占め、四月四日再び優勝カップは我聯隊にて保管する事となり、同時に師團長の賞狀を授與された。大正十五年三度優勝し昭和七年、昭和十一年共に堂々制覇の目的を達した。

一〇、外國武官の見學

明治三十二年十一月清國武官華承禧外三名は本邦陸軍々隊教育法研究の爲め當隊に通學を

許されて第六中隊附を命せられた。是れ即ち清國武官の我國軍隊見學の嚆矢である。翌三十三年九月更に武官學生鐵良以下見學士官として入隊し、傍ら士官學校に入學して一年有餘を此の聯隊に暮らし、三十六年には劉鴻遠・岳開先の入隊を見た。三十九年五月には英國パークシア聯隊附大尉ピー・ダブリュ・ノース當聯隊附を命ぜられて第十一中隊に入る。是れ英國武官が本邦軍隊見學の最初である。次で四十年九月三日英國印度軍第九グルカ聯隊附エーテ・ペートマン・シャンペン大尉亦當聯隊附を命ぜられて翌年二月末迄在つた。

支那武官の入隊

大正十四年四月十日、支那武官李士珍軍事研究の爲め我聯隊に配屬を命ぜられ第三中隊附となりて、同年六月三十日迄在隊した。

シャム武官の入隊

昭和十年十月一日シャム國武官主計大尉クンズーム・スラサクデー歩兵中尉サラブ・ヴアナ・ピンデュー軍事研究のため我聯隊に配屬され、經理室及第六中隊附となり、同十一年五月迄在隊した。

昭和十二年四月二日シャム國武官歩兵中佐ルアンヴイラヨーター、歩兵少佐ルアンウイチツトユツタサアード入隊し、聯隊本部附として約半年間在隊した。

第十章　平時美談

一、宮城正門前の事件

大正十一年三月十七日午後一時、畏くも宮城正門に於て空前の椿事が起つた。當時二重橋前の廣場には、東京博覽會見物を兼ねて各地より上京した觀光團體の幾群が、初めて仰ぐ皇城の森嚴に打たれながら襟を正して遙拜してゐた。突如として其の中より一人の怪漢躍出で、橋上を驀直に宮城正門を指して疾走して來た。その時御正門前歩哨勤務に當つてゐたものは、實に我が聯隊の衛兵であつて、恰も歩哨交代時に際し、歩哨掛上等兵星野利重は、上番歩哨一等卒中澤誠太、同二等卒松崎一郎と交代したる下番歩哨一等卒山田典右衛門、同二等卒加藤直彦を引率して、御門内に入らんとする刹那であつた。何として此の場合躊躇すべきぞ、直ちに是等衛兵は、星野上等兵指揮下に協力危險を顧みず彼の怪漢に躍掛りて突飛ばし、一方敏活に御門を閉鎖して其の侵入を防止し、又電鈴の釦を押して衛兵司令所へ警報した。危機一髪、伴の怪漢は星野上等兵の爲に突飛ばさるゝと同時に懐中してゐた爆彈は一大音響と共に破裂して、肉塊飛び血漿散つて、あはれ無殘の慘死

を遂げた。痴漢の狂態に因りて、此の聖境を汚し奉りしことは實に恐懼措く所を知らぬ次第であるが、前記衛兵の機宜を得たる動作に對しては、水町聯隊長より三月十三日全員整列の上夫々賞狀を授與して之を賞した。

賞狀　第八中隊歩兵上等兵　星野利重

大正十一年三月十七日午後一時過宮城正門前ニ於テ突發セシ兇漢ノ爆死事件ニ際シ上等兵ハ歩哨掛トシテ正門歩哨ノ交代ヲ終リ下番歩哨ヲ率ヒ御門内ニ入ラントスル刹那點火セシ爆彈ヲ懐ニシ疾驅御門内ニ侵入セントシ御門ニ取縋リタル一兇漢ヲ認ムルヤ直ニ下番歩哨ヲ指揮シ率先危險ヲ顧ミズ兇漢ヲ押シ斥ケ御門ヲ閉鎖シテ其ノ侵入ヲ防止シタルハ歩哨掛トシテ敏活勇敢ニ其職責ヲ全フシタルモノト認ム仍テ茲ニ之レヲ賞ス

大正十年三月十三日

近衛歩兵第三聯隊長從五位勳三等功五級　水町竹三

（中澤・松崎・山田・加藤各二等卒に對して附與せられた賞狀も略ぼ同一のものであるから略す）

二、赤坂離宮事件

昭和三年六月二十二日赤坂離宮に於て亦も恐懼措く能はざる事件が突發した。即ち一不敬漢正門内に闖入し畏多くも至尊に對し奉り直訴をなさんとしたのである。

當時御車寄前歩哨として服務中なりし我聯隊第二中隊田中一等卒之を認むるや敢然着劍身を挺して怪漢を阻止逮捕以て大事に至るなきを得たのである、彼れ田中一等卒が機敏適切なる處置をなし以て職責を完うしたるに對し聯隊長蜂須賀大佐より表彰狀を授與された。

表彰狀

第二中隊歩兵一等卒

田中登志夫

右者昭和三年六月二十二日赤坂離宮御車寄前歩哨トシテ立哨中直訴不敬漢離宮正門ヨリ御車寄ニ向ヒ驀進シ來ルヲ認メ守地ヲ離ルヽヲ適當ト認メ著劍シツヽ不敬漢ニ向ヒ急進シ之ヲ御車寄ニ至ル迄ニ阻止、逮捕シタルハ其動作適切機敏ニシテ警戒ノ任務ヲ完全ニ遂行シ眞ニ衆ノ模範トシテ賞讃スルニ價スルモノト認ム仍テ玆ニ之ヲ表彰ス

昭和三年六月二十五日

近衛歩兵第三聯隊長

蜂須賀喜信

三、大宮御所事件

昭和十年又も不祥事件が大宮御所に惹起した。即ち五月二十四日柵橋少尉の指揮する第七中隊の服務中午後九時頃安珍坂の外圍生籬を越えて一名の怪漢が潜入した。當時立哨中の伊藤二等兵は之を認むるや直に警報すると共に、之を逮捕し完全に其の任務を達成した。之に對し師團長宮殿下より左の如き賞狀を授與された。

賞狀

近衛歩兵第三聯隊第七中隊

陸軍歩兵二等兵　伊藤佐平

右者昭和十年五月二十四日大宮御所儀仗衛兵歩哨トシテ服務中、午後九時頃御所内安珍坂附近ヲ動哨警戒中夜間ニ乘シ、御所外圍内ニ潜入セル犯人ヲ發見スルヤ、敢然之ニ迫リ速

ニ逮捕セリ

其行動ハ沈着機敏最モ機宜ニ適シ克ク近衛兵ノ名譽ヲ發揚シ、禁闕守至ノ重任ヲ完フセルモノトス

是レ平素上官ノ教訓ヲ遵守シ熱誠勤務ニ精勵セルニ因ルモノニシテ眞ニ衆ノ模範トスルニ足ル

仍テ特ニ之ヲ賞ス

昭和十年五月三十日

近衛師團長　陸軍中將　大勳位　鳩　彦　王

昭和十四年二月十九日　印刷
昭和十四年二月廿三日　發行

近衛歩兵第三聯隊史

定價金四十五錢

編纂者　東京市赤坂區一ツ木町　近衛歩兵第三聯隊　代表者　谷口貞市

發行者　東京市麹町區九段一丁目五番地　財團法人　軍人會館出版部　代表者　平田重三

印刷者　東京市麹町區九段一丁目五番地　財團法人　軍人會館印刷所　代表者　内山和三郎

發行所　東京市麹町區九段一丁目五番地　財團法人　軍人會館出版部　振替口座東京二〇〇七番　電話九段(33)自四一〇〇一番至四一〇〇八番

不許複製